

相原古墳

—福岡県宗像市河東所在遺跡の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書

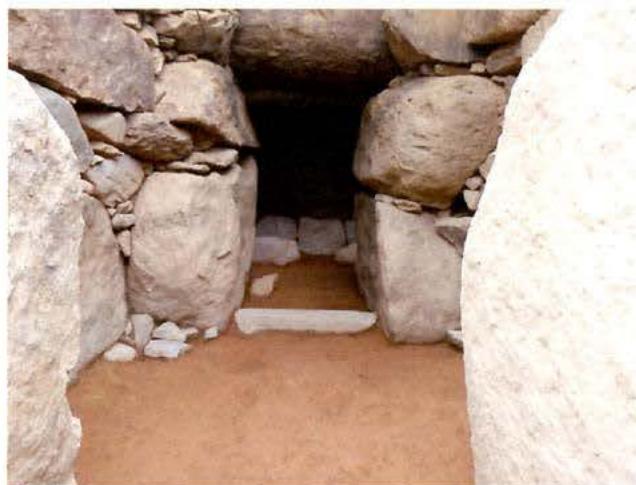
第68集

2013

宗像市教育委員会



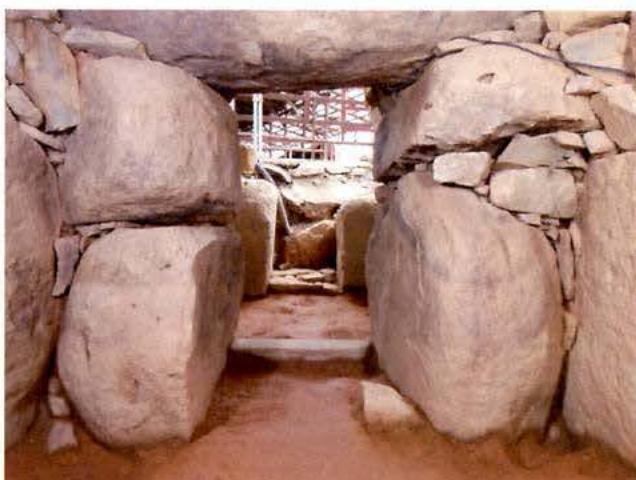
相原古墳石室全景（西から）



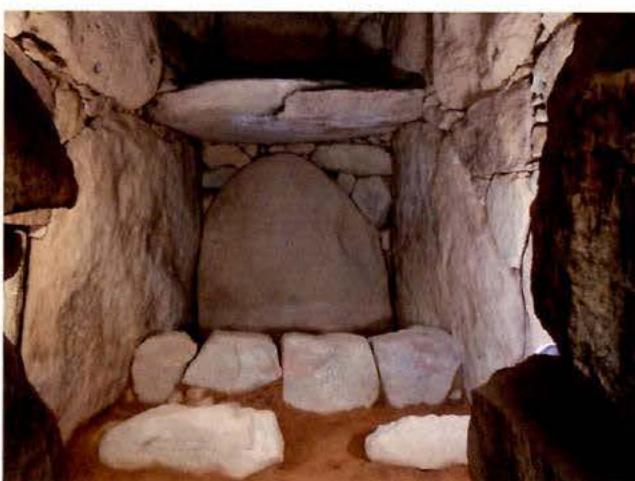
相原古墳玄門（西から）



相原古墳羨道（東から）



相原古墳玄門（東から）



相原古墳奥壁（西から）



相原古墳後室前壁（東から）

相原古墳出土装身具



相原古墳出土金銅製品



相原古墳出土金銅製刀装具

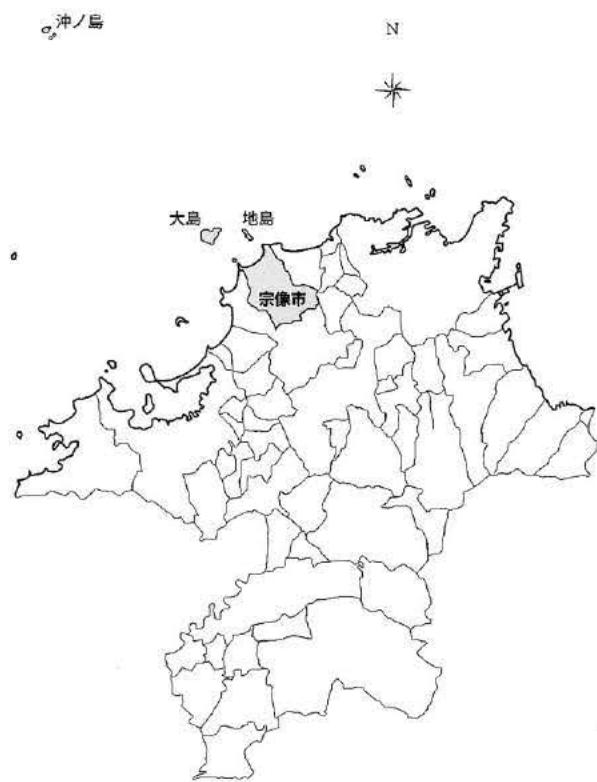


相原古墳出土鉄地金銅張板状製品



相原古墳

宗像市文化財調査報告書第 68 集



2013

宗像市教育委員会

序 文

玄界灘に面した宗像市は、古来より大陸・朝鮮半島からの先進文化をいち早く受け入れ、発展を遂げてきました。

平成 24 年 4 月 28 日には郷土文化学習交流館「海の道むなかた館」が開館し、平成 25 年 3 月 23 日には 100,000 人目の来場者を迎えることができました。この館を拠点とし、市内の遺跡とリンクさせることにより、市域全体を一つの博物館としていきます。この壮大な博物館をおとずれる多くの人に、本市特有の自然や歴史について知ってもらい、市民協働の文化財保護活動につなげていきたいと考えています。

さて、本書は平成 23 年度に実施された「相原古墳」の発掘調査成果をおさめたものです。今回の調査では、宗像市内最大の前方後円墳といわれている E - 1 号墳の石室内調査をおこないました。そこで朝鮮半島の新羅系馬具が発見され、この古墳の被葬者が有力者であったとあらためて認識されるものでした。今回の成果報告が新たな文化財保護活動の一助になることを念願します。

最後になりましたが薄牧場の薄一郎様をはじめ、今回の調査全般にわたりご協力いただいた方々へ、心から感謝いたしますとともに、今後とも本市の文化財行政に御理解と御協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

平成 25 年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教育長 久芳 昭文

例　言

- 1 . 本書は宗像市教育委員会が平成 23 年度に国庫補助事業を受けて実施した福岡県河東 470-13-1・2、471 番地に所在する相原古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 . 相原古墳の宗像市文化財番号は 00213 である。
- 3 . 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となり市民協働部 市民活動推進課 文化財係の坂本雄介が担当した。
- 4 . 現地調査期間は平成 23 年 10 月 1 日～平成 24 年 3 月 30 日までである。
- 5 . 本書に掲載した遺構図の標高は海拔を表し、方位は特に記述がない場合は磁北である。また、基準点座標は世界測地系による数値を用いた。
- 6 . 本書に掲載した遺構実測図の作成は、坂本、岡本格、権丈和徳（別府大学）が行った。
- 7 . 本書に掲載した遺物実測図の作成は、坂本、岡本、松岡千鶴子、園田理江子、田中園子、岡原景、権丈が行った。
- 8 . 本書に掲載した遺構、遺物の製図は、中原美知子、猪俣和代、藤本政晴が行った。
- 9 . 遺物の整理は、園田、松尾仁美、西村広子、田中、濱田広美、黒岩裕美子、岩本和子、廣瀬富知恵、田島圭伊子が行った。
10. 本書に掲載した写真撮影は航空写真を株式会社測技へ委託し、その他を坂本が行った。
11. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真等の資料は、宗像市教育委員会が保管している。
12. 本書の執筆及び編集は、坂本が行った。

目 次

第 I 章 序 説

1. 調査に至る経緯	1
2. 組織と構成	2
3. 調査の経過	2
4. 位置と環境	3

第 II 章 調査の記録

1. 調査の概要	5
2. 遺構の調査	5

第 III 章 ま と め 21

挿図目次

第 1 図 相原前方後円墳石室実測図（『筑紫史論』波多野院三より転載）

第 2 図 東海第五高校歴史クラブ作成墳丘測量図（S = 1/1,000 花田勝広氏提供）

第 3 図 相原古墳周辺主要遺跡分布地図（S = 1/25,000）

第 4 図 現況地形測量図（S = 1/100）

第 5 図 石室実測図（S = 1/80）

第 6 図 石室内堆積土土層観察図（S = 1/40）

第 7 図 石室出土土器実測図 1（S = 1/3）

第 8 図 石室出土土器実測図 2（S = 1/4）

第 9 図 石室出土装身具実測図（S = 1/1）

第 10 図 石室出土金銅製品実測図（S = 1/2）

第 11 図 石室出土鉄器実測図 1（S = 1/2）

第 12 図 石室出土鉄器実測図 2（S = 1/2）

第 13 図 石室出土鉄器実測図 3（S = 1/2）

第 14 図 石室出土鉄器実測図 4（S = 1/2）

第 15 図 石室出土鉄器実測図 5（S = 1/2）

第 16 図 石室出土石器実測図（S = 1/1）

第 17 図 石室相原古墳群復元配置図（S = 1/2,500）

第 18 図 相原古墳墳形復元想定図（S = 1/500）

表目次

- 表 1 出土土器観察表
- 表 2 出土装身具観察表
- 表 3 出土石器観察表
- 表 4 出土金属器観察表 1
- 表 5 出土金属器観察表 2

図版目次

巻頭カラー図版 1

- 相原古墳石室全景（西から）
- 相原古墳羨道（東から）
- 相原古墳奥壁（西から）
- 相原古墳玄門（西から）
- 相原古墳玄門（東から）
- 相原古墳後室前壁（東から）

巻頭カラー図版 2

- 相原古墳出土装身具（16～18）
- 相原古墳出土金銅製品（19～24）
- 相原古墳出土金銅装製刀装具（46～48）
- 相原古墳出土鉄地金銅張板状製品（190）
- 図版 1 相原古墳周辺航空写真（南東から） 昭和 47 年撮影相原古墳全景（南東から）
- 図版 2 石室詳細写真 1
- 図版 3 石室詳細写真 2 調査前現況写真
- 図版 4 出土土器写真（1～15）
- 図版 5 出土鉄器写真（25～68）
- 図版 6 出土鉄器写真（69～109）
- 図版 7 出土鉄器写真（110～154）
- 図版 8 出土鉄器・石器写真（155～193）

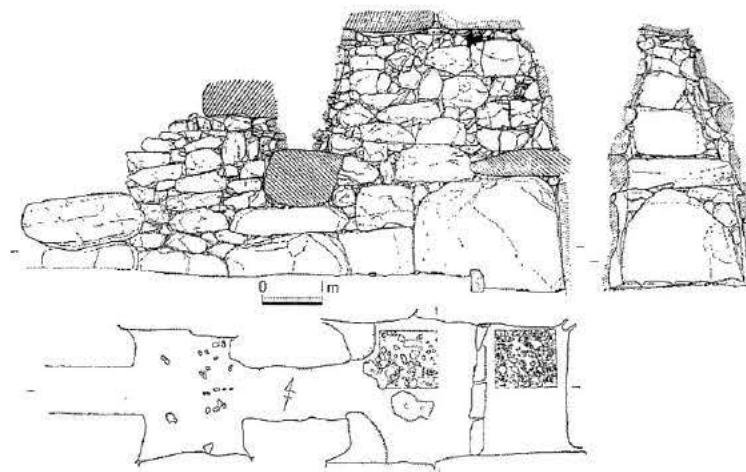
第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

平成 22 年に宗像市河東 470-13-1・2、471 番地において、薄牧場代表薄一郎氏より古墳の石室を整備し、公開をしたいがどのようにすればよいかとの問合せがあった。該当の古墳は、市内でも最大の前方後円墳と言われ、過去の調査において、主体部は石棚を持つ複室の横穴式石室であることが確認されている。また、石棚を持つ古墳は平等寺瀬戸 1 号墳と石屋形とされるが構造状広義の石棚と認識できる桜京古墳の 2 基のみであり、本古墳は非常に重要なものであることを薄氏に伝えた。市として整備について、過去の調査だけでは不十分であるため古墳の詳細を調査した後、どのような整備が一番適当であるかを判断したいとのことを伝えた。薄氏からは、調査について快諾をいただき、次年度に国庫補助事業による保存のための確認調査を行うように決定した。整備については、調査後にあらためて協議を行うこととなった。

なお、文化財発掘調査に係る手続きは以下の通りである。

文化財保護法第 99 条	23 宗郷第 602 号
埋蔵物発見届	23 宗郷第 651 号
埋蔵文化財保管証	23 宗郷第 652 号
発掘調査終了届	23 宗郷第 656 号



第 1 図 相原前方後円墳石室実測図 (『筑紫史論』波多野晓三より転載)

2. 組織と構成

平成 23 年度調査組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	久芳 昭文
		市民協働部長	福崎 常喜
		市民活動推進課長	磯部 輝美
		市民活動推進課参事	清水 比呂之
		文化財係長	安部 裕久
庶務・会計		主査	判田 博明
調査担当		技師	坂本 雄介

平成 24 年度調査組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	久芳 昭文
		市民協働・環境部長	福崎 常喜
		郷土文化学習交流課長	清水 比呂之
		文化財係長	安部 裕久
庶務・会計		主査	判田 博明
報告書担当		技師	坂本 雄介

3. 調査の経過

発掘作業の経過

発掘調査は、墳丘の現況測量と石室流入土の除去、石室実測を行った。墳丘の現況測量は、平板測量により 1/100 の図面を作成した。石室流入土の除去は、前室と後室をそれぞれの中心から 4 分割し、玄門と羨道は中心軸で 2 分割し、人力で移植ゴテを使用し掘削した。石室実測は、2 m メッシュを組み 1/20 の図面を作成した。後室天井付近の実測は、ローリングタワーを 1 段組み、その上に脚立を立て行った。メッシュを組むときには、レーザー墨出器と光波測距器を使用した。墳丘が薄く、雨天時には雨漏りが激しく、前室は踝まで水が溜まることもしばしばであった。

期間は平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 3 月 30 日である。

整理作業の経過

整理作業は、土器、鉄器、装身具の洗浄を行い、接合復元作業を行った。その後、分類、図化遺物の選択作業を行った。その後、図化、浄書作業を経て挿図完成後、遺物写真撮影を行った。最後に図面、写真の台帳化を行った。

期間は平成 24 年 6 月 1 日～平成 25 年 3 月 29 日である。

4. 位置と環境

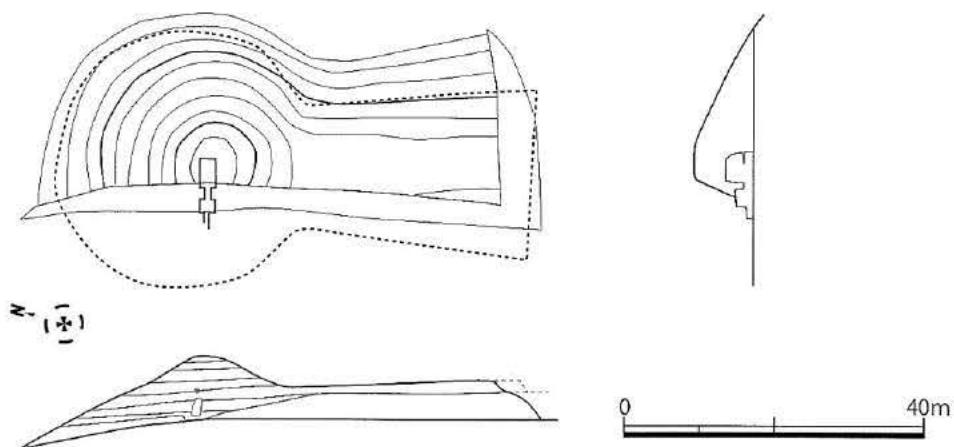
宗像市は福岡県北部に位置し、福岡市・北九州市のほぼ中間点にあたる。北西方向を除き、孔大寺山地（四塚山地）と宗像・鞍手低山地に囲まれた盆地状地形である。東は猿田峠、南は宮若市境の靡山・磯辺山から出た水は西流あるいは南流して赤間や東郷で合流し釣川を形成する。さらに北の湯川山・孔大寺山・金山・城山から出た水も加わり、玄界灘へと注いでいる。釣川とその支流により形成された沖積地は、豊饒な沃野をなしている。この沖積地を取り巻くように丘陵が発達し、丘陵上には群集墳が多く形成されている。

相原古墳群は、孔大寺山（標高 471.4m）から西へ派生した丘陵端にあり、西側丘陵下を横山川が南流し、釣川に合流する。本古墳群は昭和 52・53 年度に調査が実施され、合計で 23 基の古墳が調査された。2 号墳は狭長な石室と丁寧な築成による墳丘を持つ古墳で、墓道から新羅土器壺が出土しており、朝鮮半島とのつながりを示している。6 世紀前半～7 世紀後半に築造された古墳群である。

今回調査した古墳は、昭和 46 年 10 月に福岡教育大学の波多野暎三氏により調査された前方後円墳で、主体部は石棚を持つ複室の横穴式石室であることが確認されている。翌年には東海大学附属第五高等学校（以下東海第五高校）歴史クラブにより墳丘測量が行われ、墳丘の残存長は 62 m、後円部直径 28～30m、高さ 9m、前方部幅残存長 16m、推定長 23m、高さ 2m を計測している。現状は、その後の削平により石室をかろうじて覆う程度の墳丘が残存し、周囲は盛土整地が行われ、旧状は完全に失われている。周辺にはほかに円墳が 3 基存在したが、調査されずに消滅してしまった。また本古墳は、花田勝広氏（滋賀県野洲市職員）の論文に E-1 号墳と記載されており、この名称が一部で使用されているが宗像市として個別に古墳の番号は付していない。そのため今回の報告書では単純に相原古墳と呼称することにする。

参考文献

- 宗像市史編纂委員会 1997 『宗像市史』 通史編第一巻 自然 考古
竹内理三ほか編 1988 『角川日本地名大辞典』 40 福岡県
宗像町教育委員会 1979 『相原古墳群』 宗像町文化財調査報告書 第 1 集
宗像市教育委員会 2011 『宗像市遺跡等分布地図』



第 2 図 東海第五高校歴史クラブ作成墳丘測量図 (S=1/1,000 花田勝広氏提供)



第3図 相原古墳周辺主要遺跡分布地図 (S = 1/25,000)

1. 相原古墳
2. 相原古墳群
3. 稲元古墳群
4. 須恵須賀浦遺跡
5. 河東山崎古墳
6. 池浦トボシ遺跡
7. 久戸古墳群
8. 河東森ヶ谷古墳
9. 東郷登り立遺跡
10. 田熊石畑遺跡
11. 東郷高塚古墳
12. 久原灌ヶ下遺跡
13. 曲香畠遺跡
14. 田久貴船前1号墳
15. 須恵クヒノ浦遺跡

第Ⅱ章 調査の記録

1. 調査の概要

相原古墳は現在薄牧場の敷地内にあり、現状では石室をぎりぎり覆う程度墳丘が残っている。前室天井石 1 石と羨道腰石より上は破壊により存在しない。また、墳丘から天井石の一部が顔をみせており、前室部分には亀裂が入っている。発掘調査は、はじめに現況の写真撮影を行い、 $S = 1/100$ の平板測量を行った。次に昭和 46 年作成の石室実測図を参考に流入土を除去し、新たに石室の実測を行うこととした。現況では羨道と前室の腰石は流入土により完全に隠れていた。また、羨道から後室中心付近まで排水用のパイプが敷設されていた。そのため、初めに前回調査の状態に戻すべくパイプの撤去と新規流入土の除去を行った。羨道と前室はこの時点で床面が確認できるものと考えていたが、墳丘からの流入土がさらに堆積していた。後室はかろうじて前回調査で確認されている仕切石の上面が見えていた。屍床部分は奥壁隅から土砂が流入していたが、大規模なものではなかった。この時点で、羨道と前室は床面を確認するために土層ベルトを残しながら掘り下げた。後室も同様に土層ベルトを残しながら掘り下げた。この掘り下げにともない前室からは多くの鉄器類が出土した。羨道と後室からは散発的な出土にとどまった。前室は 40cm ほど下げた所で地山面を確認した。羨道部では敷石、樋石を確認、玄門部からも前後で樋石を確認した。後室は確認されていた仕切石の手前側に平行して新たな仕切石を 2 石確認した。屍床部分は玉砂利をしいていた。後室では、地山面の直上からビニールが確認され、かなり最近にも荒らされていたようである。調査終了時確認された遺物は鉄器、装身具、須恵器、土師器が出土した。以下詳細を述べる。

2. 遺構の概要

墳丘

墳丘は、石室を辛うじて覆う程度残っている。天井石の一部は露出しており、開口部付近ではクラックが目立つ。墳丘削平前の写真と比べても旧状を窺い知ることは出来ない。

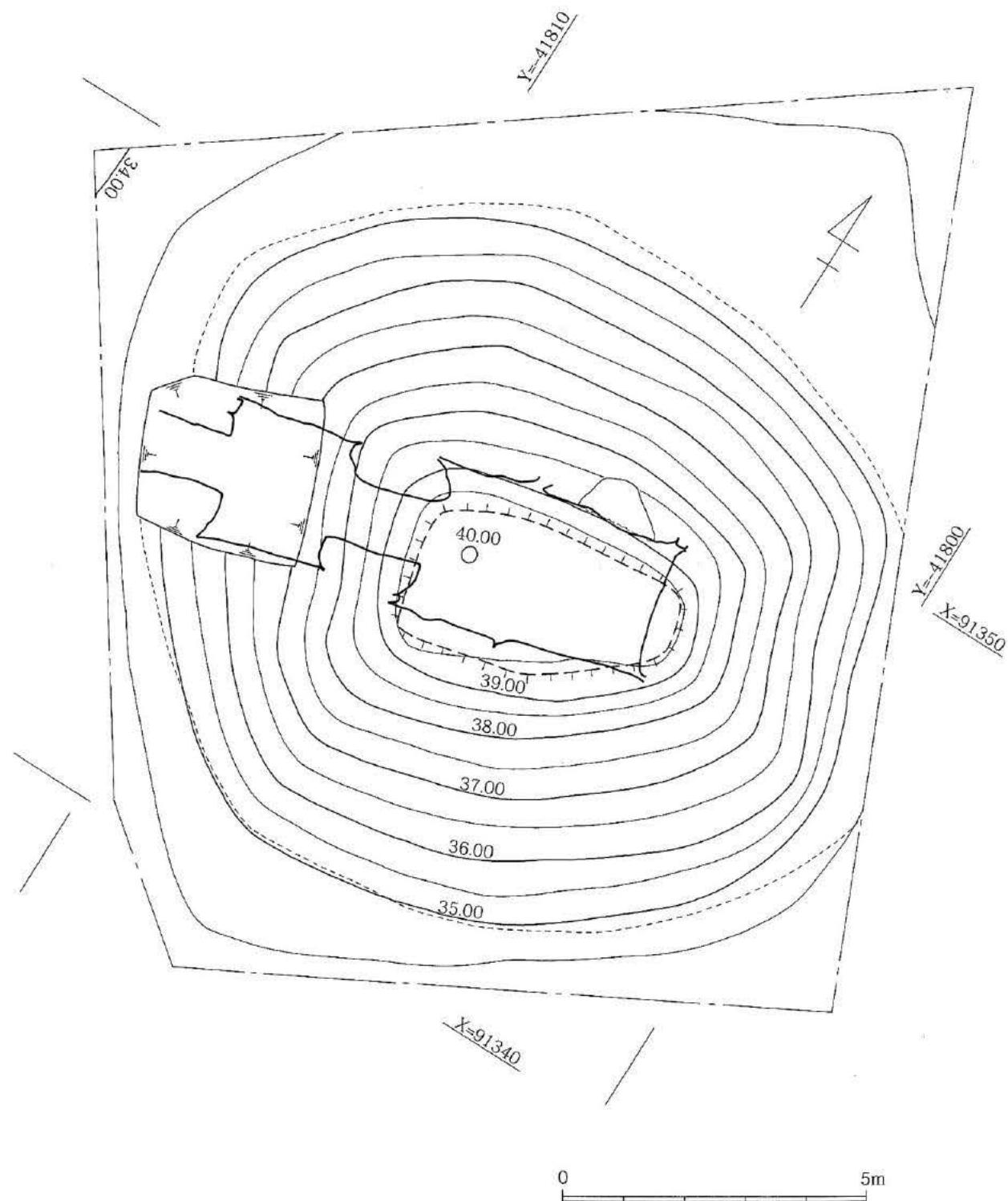
石室床面から残存墳頂までは 7.72m を測る。前室天井石上部では版築が確認できる。現況測量図を東海第五高校歴史クラブが作成した測量図と比較すると、墳頂部は 1 m 程の削平を受けている。また、墳裾が想定される標高は、後世の盛土により埋められており、地下には墳丘の一部が削平されずに残っている可能性がある。

石室

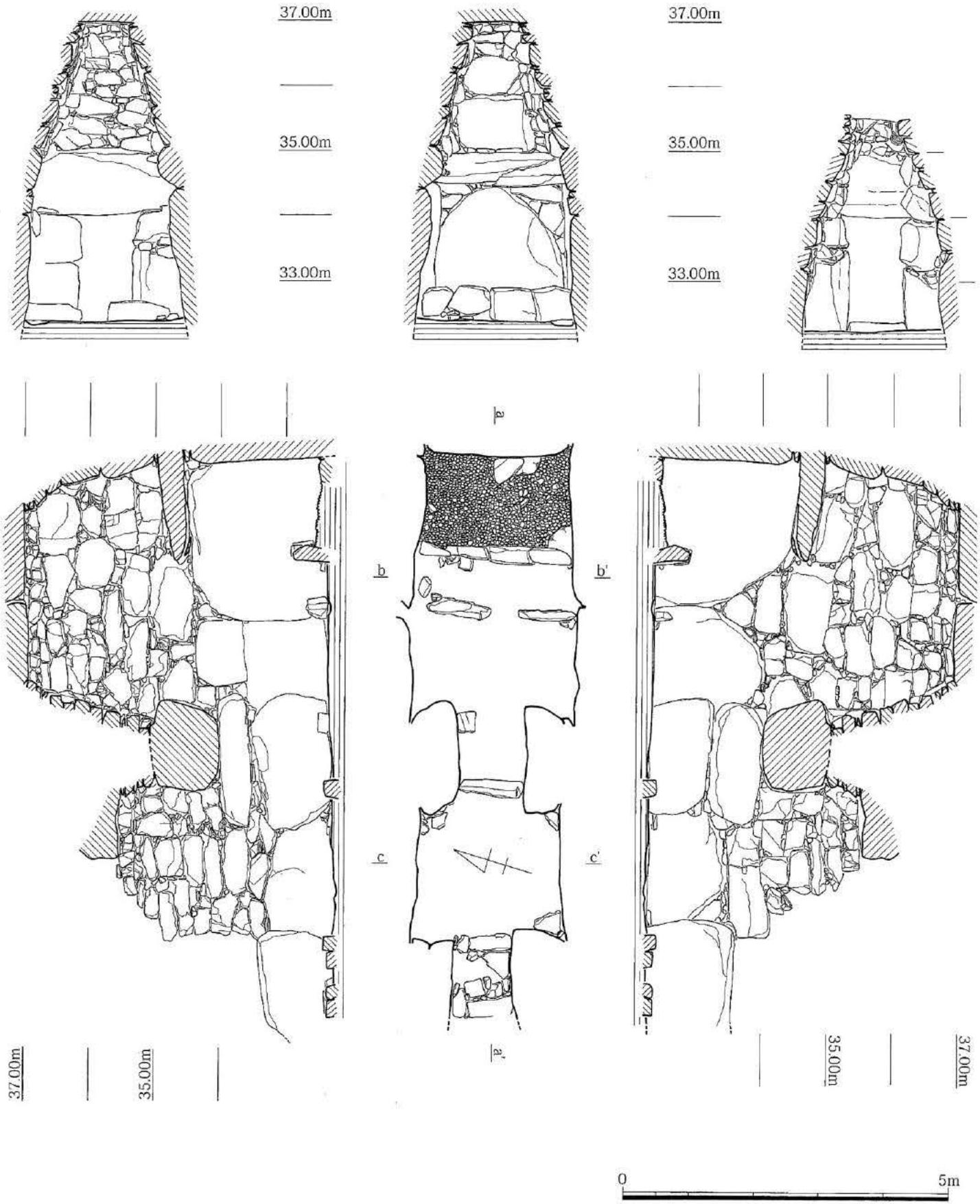
石室は複室の横穴式石室で、主軸を N – 74° – E にとり、南西に開口する。石室の規模は、石室長 8.62m 以上、後室天井高 4.65m、後室長 3.84m、後室奥壁側幅 2.21m、後室玄門側幅 2.47m、前室天井高 3.26m、前室長 2.12m、前室玄門側幅 2.12m、前室羨道側幅 2.35m を測る。表面を工具で削り整えているものがある。石材は、変朽安山岩、角閃石安山岩、角礫岩、黒雲母花崗岩、玄武岩が使用されている。

羨道は右側長さ 1.65m 以上、幅 0.75m 以上、高さ 1.4m、左側長さ 1.55m 以上、幅 0.48m 以上、高さ 1.15m の大石を腰石に据えている。石列は現地表であるコンクリートの下に続いている。床面は割石を平坦に敷き詰めている。昭和 46 年の調査時は左壁側には腰石の上にもう 1 石あったが、現在はなくなっている。框石は前室側に 1 石確認できる。

前室は大振りの 1 石を腰石に据え構築し、長さ 2.12m、玄門側幅 2.12m、羨道側幅 2.35m、高さ 3.26m を測る。左奥、右手前、右奥には羨道と同様の床石が残存している。側壁は羨道側が破



第 4 図 現況地形測量図 ($S = 1/100$)



第5図 石室実測図 ($S = 1/80$)

壊されているが、残存部はやや急な持ち送りをしている。上部にいくにつれやや小振りな石を使用している。天井石は1石しか残っていないが本来であればもう1石あったと考えられる。

玄門は高さは1.65mあり、確認されている中では市内で一番高い。腰石には右側が長さ1.65m、高さ0.95m、左側が長さ1.75m、高さ1.25mある石を据え、かなり長い玄門を造りだしている。樋石は羨道側に門幅に合わせた1石を用い、後室側は小振りな1石が残存しているのみで、2石以上を組合せ構成されていたと考えられる。樋石は前室側1石、後室側1石以上である。樋石は長さ1.3m、幅2.4m以上、高さ1.08mを測る1石である。

後室は大振りの石を腰石に据えている。長さ3.84m、玄門側幅2.47m、奥壁側幅2.21m、高さ4.65mを測る。奥壁と側壁の奥壁側腰石の上には石棚がある。石棚は長さ1.57m、幅2.02m、厚さ0.4mを測る。右側は割れているが、状態としては落ち着いている。この石棚端部直下には仕切石があり、4石を使用して後室を区切る。また、この仕切石の玄門側50～70cmから2石の仕切石が確認された。中央部分は石材が確認されず開いている。床面は羨道や前室と同じ割り石を敷き詰めたものであるが、仕切石にかかる部分に残存するのみである。石棚の下は玉砂利が敷き詰められ屍床としてもちいられたのであろう。

出土遺物

本調査から出土した遺物は、須恵器、土師器、石器、装身具、金銅製品、鉄器である。後室からの出土は少なく、前室からの出土が多かった。以下に主要な遺物について紹介する。詳細については遺物観察表を参照されたい。

須恵器（第7・8図 図版7） 4は器台の脚と壺の接合部の破片で、非常に焼成が良く外面は黒光りしている。脚部には円孔が2箇所確認でき、反転すると4箇所に施されていたようである。5は器台脚部の破片で、非常に焼成が良く外面は黒光りしている。3段の透かしが確認できる。反転すると4箇所に施されていたようである。外面はカキ目が施される。6は器台脚裾の破片で、外面には斜格子状のキザミ目が施される。

土師器壺（第7図 図版4） いずれも底部切離しが回転イトキリである。口径は11～12.5cm、底径は7.5～7.8cmを測る。

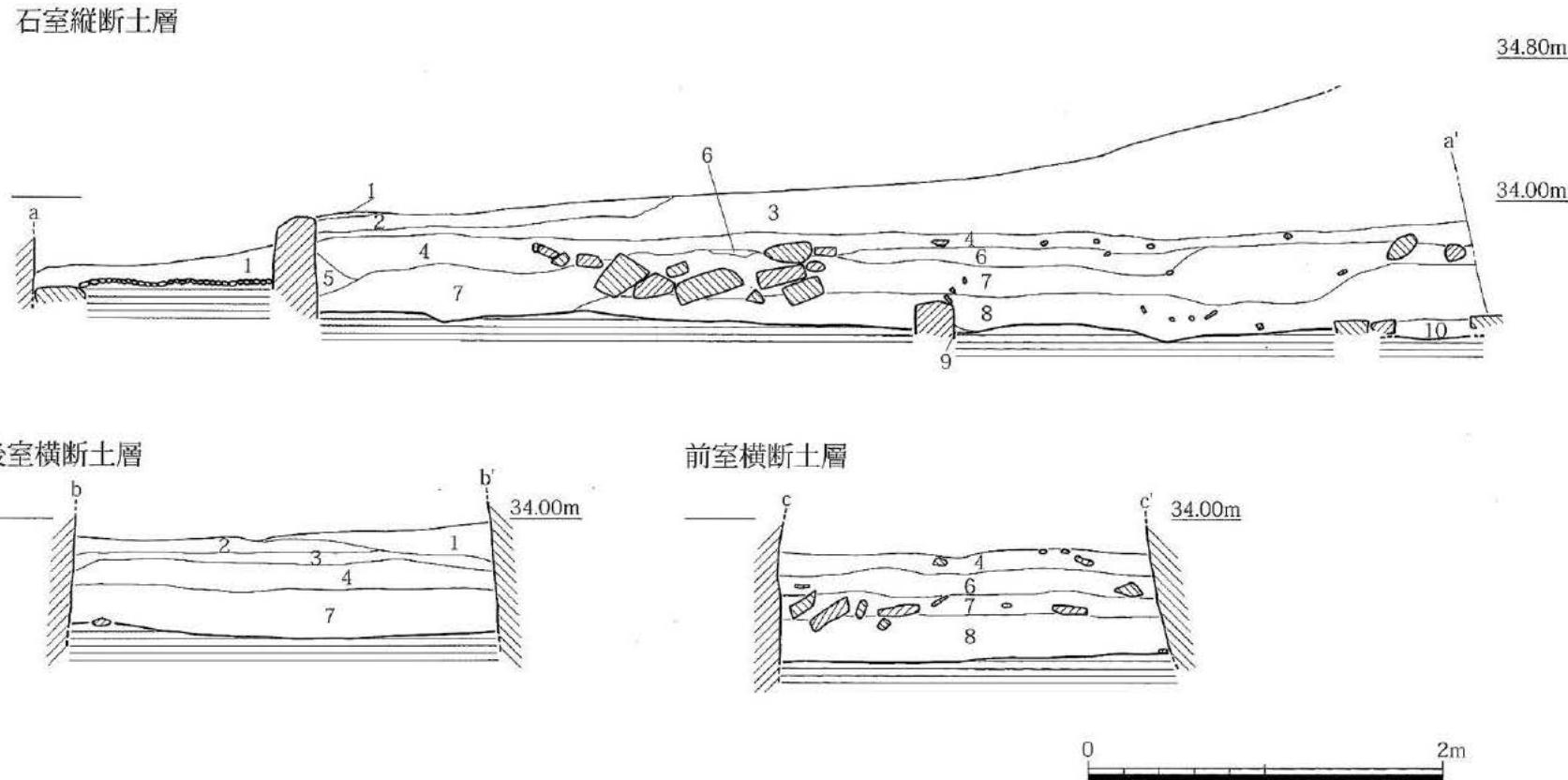
装身具（第9図 卷頭図版2） 16は瑪瑙製切子玉である。穿孔は両側から行われている。17・18は琥珀製棗玉である。17は穿孔が途中で止まっている。

金銅製品（第10図 卷頭図版2） 19～22は金銅製辻金具の脚である。先端部には棘状の突起があり、責金具が癒着しているものもある。脚以外の部分は発見されていない。23は下半を欠損した空玉である。

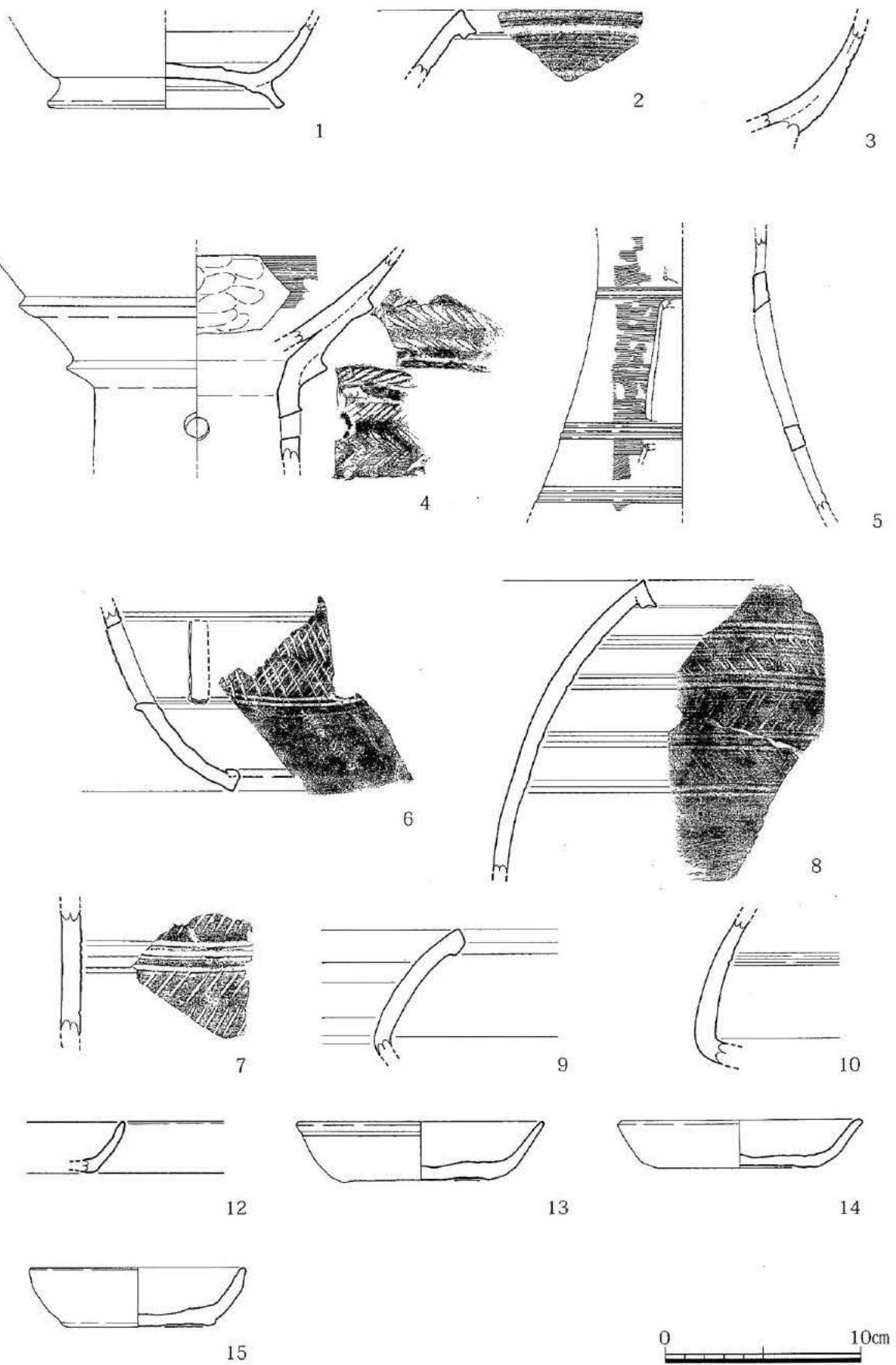
鉄器（第11～15図 図版5～8） 25～34は鏃である。25・26は平根鏃、それ以外は尖根鏃である。43～46は刀である。46は刀の茎と思われる。青銅製ハトメ金具が目釘穴内に入れ込まれている。47・48は刀装具である。45のカマス切先と一連のものと考えられる。49～60は鉾である。茎部は断面八角形を呈し、刃部側と石突側の破片が複数あり3本以上は副葬されていたと考えられる。61は衡内環の継目である。62は衡外環と引手環の継目である。63は引手の破片である。64は方形立闇付素環鏡板である。65は引手壺である。66は輪燈である。67～70は三角錐形壺燈であり、一対になる。71～73は兵庫鎖である。74・75は吊金具と考えられる。76・77は鉸具である。78・79はシオデ金具、80・81はシオデ座金具、83～87は鉄地金銅張

第6図 石室内堆積土層実測図 ($S = 1/40$)

9



1. 暗橙赤色土（サラサラ） 2. 淡褐黄色土（ややかたい） 3. 淡黄褐色土+地山ブロック 4. 暗橙赤色ブロック+暗褐色土+円れき（床石）
5. 橙赤色土ブロック+暗褐色土（4よりやや明るい） 6. 4+地山ブロック（1cm大ほど） 7. 褐色土（サラサラ）+床石
8. 暗褐色土（炭やや多い） 9. 橙色粘質土 10. 暗橙褐色土

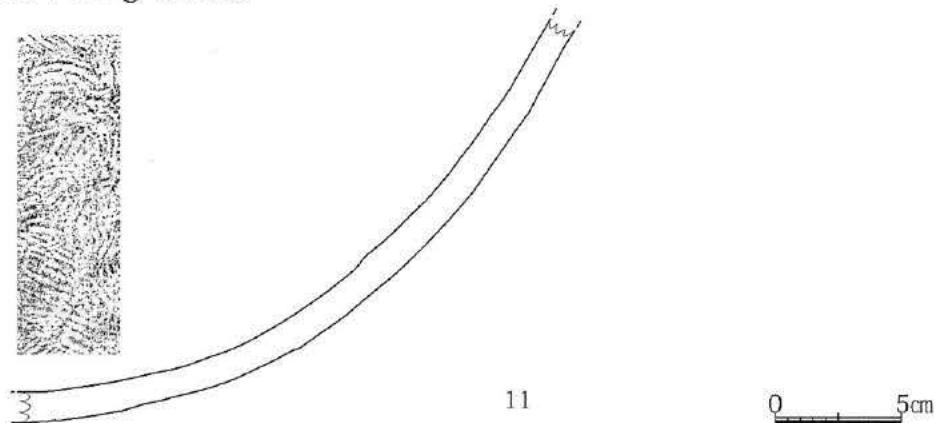


第7図 石室出土土器実測図1 (S = 1/3)

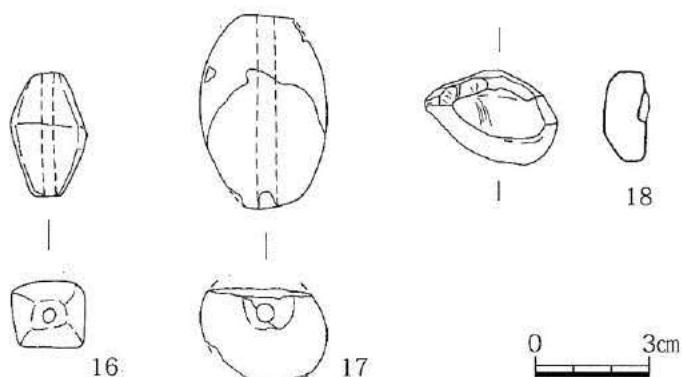
鞍縁金具である。98～100・104・107～109は平面八角形を呈し、半円形1鉢打ちの脚が4点付属する鉄地金銅張辻金具である。鉢部半球形部が低く段が弱いものと、鉢部半球形部がやや高く顯著な段をなすものがある。101～103・105・106は鉢部下部に段がある八角形の雲珠である。110～118は鉄地金銅張辻金具の脚である。119～123は鉄地金銅張八角形八脚雲珠の方形1鉢打ちの脚である。126～134は鉄地金銅張三葉文心葉形鏡板付轡か三葉文心葉形杏葉の破片である。141～145は胄である。146～189は挂甲小札である。3枚綴りになっている破片もあるがたいていは1枚である。布や革紐が確認できるものもある。190は用途不明の鉄地金銅張板である。鉢は4つ確認できる。191は小型の袋状鉄斧である。

石器（第16図 図版8）192は黒曜石製の鎌である。

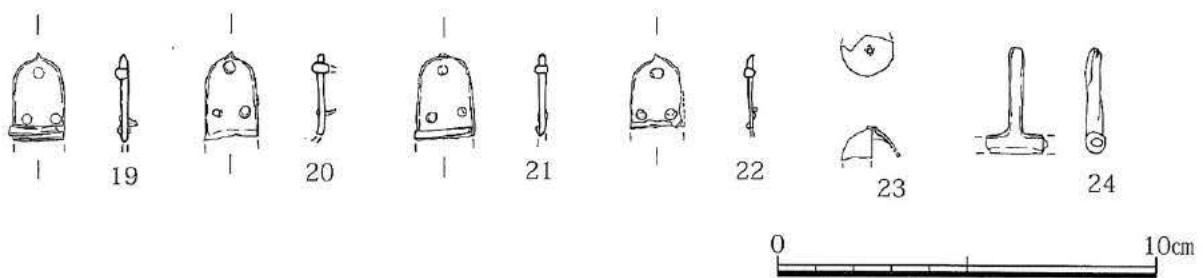
また、図示していないが、鉄滓が出土している。黒灰色を呈し、細かな気泡が多くみられる。体積にくらべ比重は軽く19 gである。



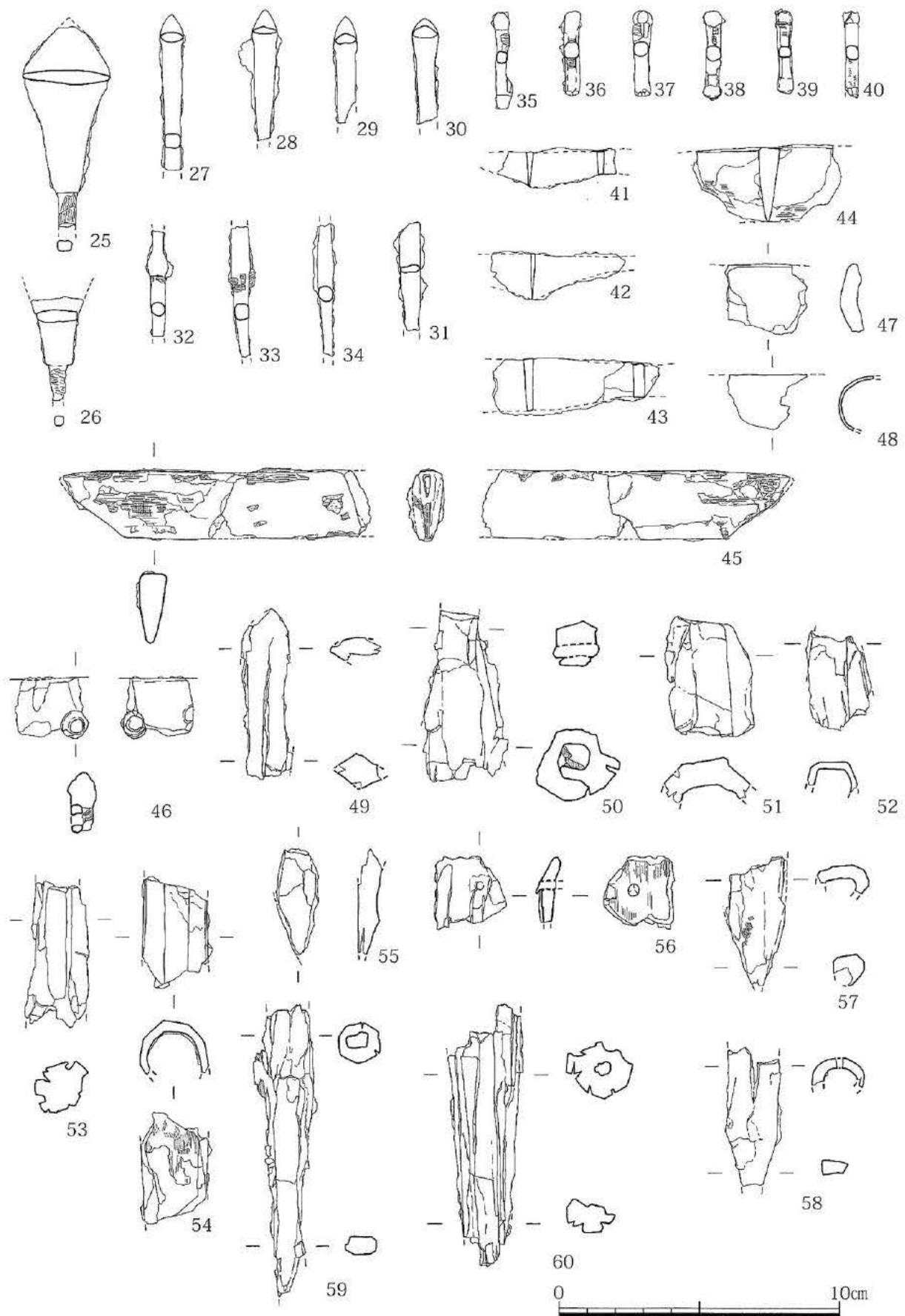
第8図 石室出土土器実測図2 (S = 1/3)



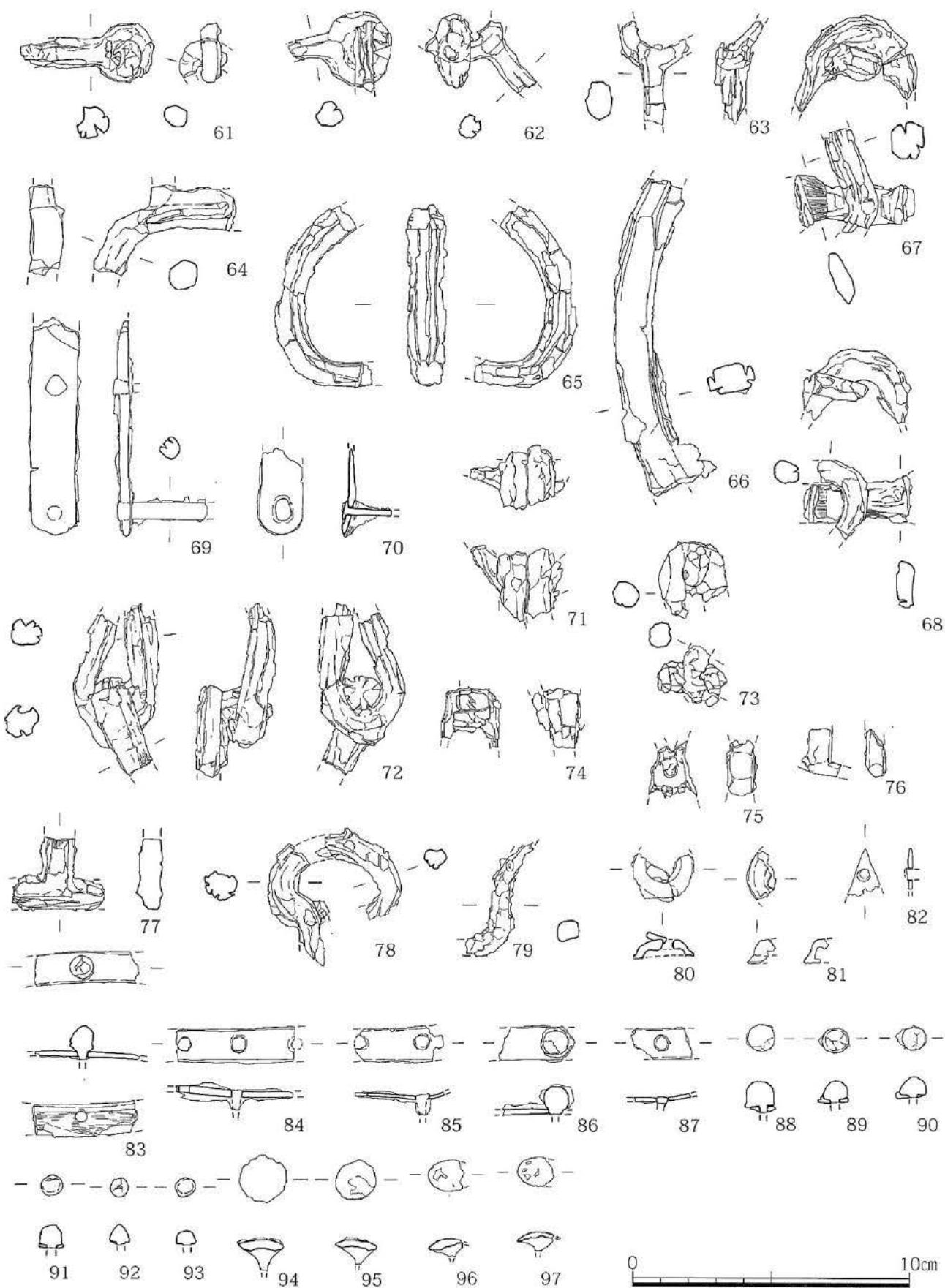
第9図 石室出土装身具実測図 (S = 1/2)



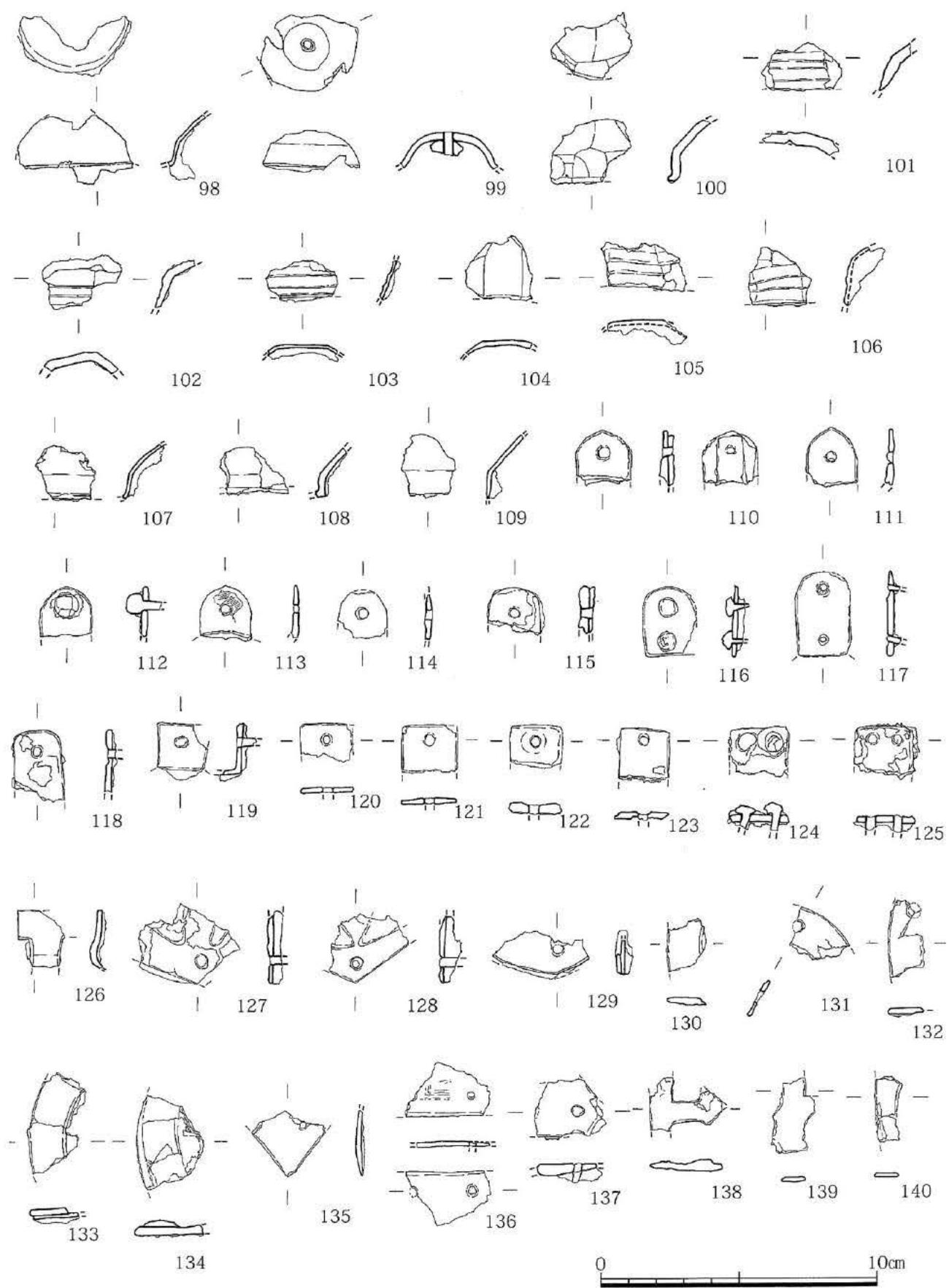
第10図 石室出土金銅製品実測図 (S = 1/2)



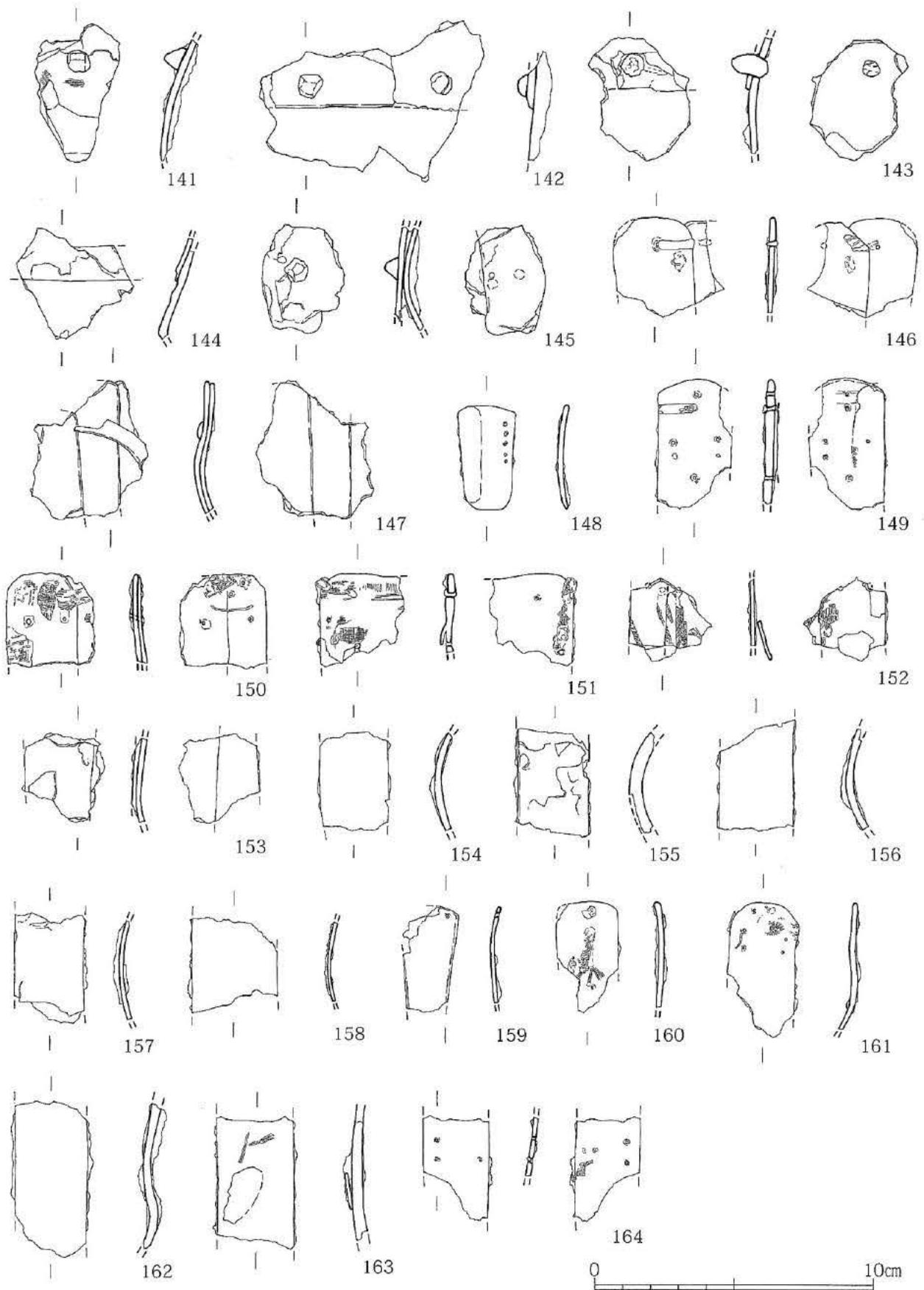
第11図 石室出土鉄器実測図1 (S = 1/2)



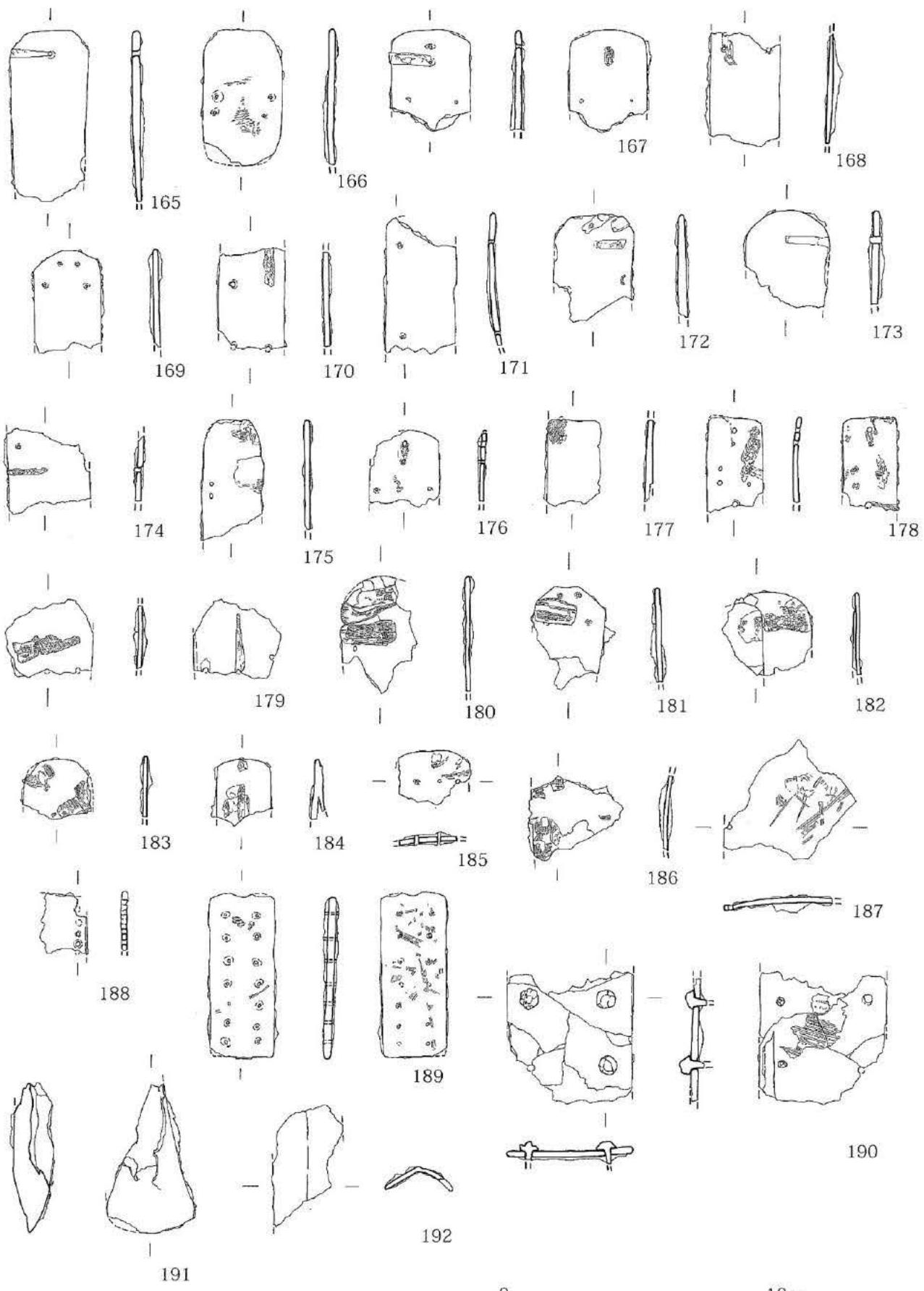
第12図 石室出土鉄器実測図2 (S = 1/2)



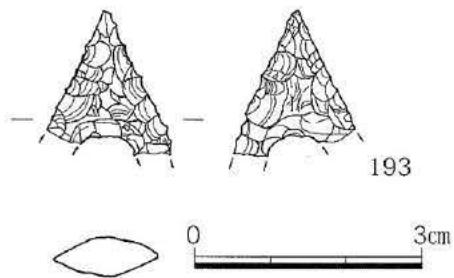
第13図 石室出土鉄器実測図3 (S = 1/2)



第14図 石室出土鉄器実測図4 (S = 1/2)



第15図 石室出土鉄器実測図5 (S = 1/2)



第16図 石室出土石器実測図 ($S = 1/1$)

表1 出土土器観察表

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	法量(復元)		調査		胎土	焼成	色調		備考	
					口径(cm)	盤高(cm)	底径(cm)	内面	外面		内面	外面		
1	7	前室埋土	須恵器	長頸壺		4.3+ α	(12)	回転ナデ、回転ナデ後指ナデ	回転ナデ	微細砂粒を含む	やや不良	灰赤色	褐色	貼り付け高台(高台高さ1.4cm)
2	7	前室埋土	須恵器	壺		5.6+ α		当て具による成形	力牛目後刺突文、沈線2条	微細砂粒を含む	良	灰色	青黒色	口縁部小破片
3	7	玄門埋土 糞道埋土	須恵器	器台		10.5+ α		ヘラケズリ後指ナデ、指頭圧痕	回転ナデ後刺突文	微砂粒(粗砂粒を含む)	良	暗灰色	青黒色	鉢形器台
4	7	玄門埋土	須恵器	器台		14.0+ α		指押さえ、ナデ	回転ナデ後横杉状刺突文	細砂粒を含む	良	黑色	暗灰色(自然端)	壺形器台、円孔2箇所
5	7	前室埋土	須恵器	器台		9.3+ α		回転ナデ	力牛目、沈線7条	微砂粒を含む	良	灰色	暗オリーブ灰色	長方形透かし3段
6	7	前室埋土	須恵器	器台		6.3+ α		回転ナデ	回転ナデ、沈線4条、斜格子状キザミ2段	微砂粒を含む	良	綠灰色	綠灰色	脚端破片
7	7	前室埋土	須恵器	器台		3.4+ α		当て具による成形後回転ナデ	回転ナデ、沈線3条、刺突文3段	精良(粗砂粒を含む)	良	暗青灰色	灰色~青黒色	脚破片
8	7	玄室埋土	須恵器	壺		14.8+ α		回転ナデ	回転ナデ、沈線8条、刺突文4段	粗砂粒を含む	良	灰色	青黒色	大腹口縁部
9	7	前室埋土	須恵器	壺		6.3+ α		口縁付近灰かぶり、回転ナデ	回転ナデ	微砂粒を含む	良	青黒色	青黒色	外面に自然端、口縁部片
10	7	前室埋土	須恵器	壺		7.4+ α		回転ナデ	回転ナデ、沈線2条	微・細砂粒を含む	良	暗青灰色	暗灰色	頭部片
11	8	前室埋土 玄室埋土 糞道埋土	須恵器	臺		16.2+ α		青海波文	平行タタキ	微砂粒を含む	良	灰色	灰色~黄灰色	大腹底部~脚部片
12	7	玄室埋土	土師器	壺		2.6		回転ナデ~不定方向ナデ	回転ナデ	微・細砂粒を含む	やや不良	橙色~灰褐色	にぶい橙色	
13	7	玄室埋土	土師器	壺	12.5	3	7.5	回転ナデ~不定方向ナデ	回転ナデ、底面糸切り	粗砂粒	良	にぶい橙色	にぶい褐色	
14	7	前室埋土	土師器	壺	12.4	2.4	7.8	回転ナデ~不定方向ナデ	回転ナデ、底面糸切り	微砂粒を含む	良	にぶい橙色	にぶい橙色	
15	7	前室埋土	土師器	壺	11	3	7.8	回転ナデ~不定方向ナデ	回転ナデ、底面糸切り	粗・細砂粒を含む	良	橙色	橙色	雜なつくり・口縁部に油煙付着

表2 出土装身具観察表

遺物番号	図版番号	出土地点	材質	種類	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	備考
16	9	前室埋土	メノウ	切子玉	1.6	1	0.15	完形
17	9	前室埋土	琥珀	纏玉	2.5	1.7	0.2	一部欠損
18	9	後室埋土	琥珀	纏玉	1.8+ α	1.2+ α	0.2	残存少量

表3 出土石器観察表

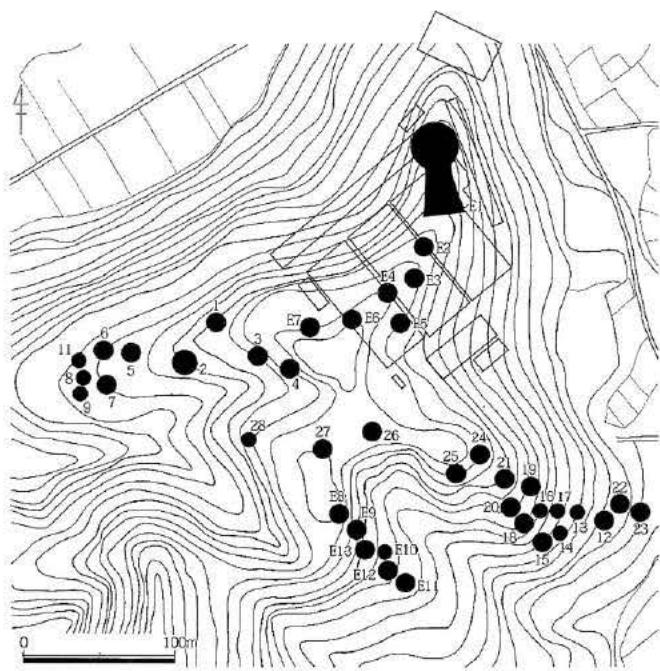
遺物番号	図版番号	出土地点	材質	種類	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	備考
193	16	前室埋土	黒曜石	石鏃	1.9+	1.6	0.5	

表4 出土金属器観察表1

遺物 番号	図版 番号	出土地点	材質	種類	長さ・縦(cm)	幅・横(cm)	厚さ(cm)	備考
19	10	前室埋土	銅	辻金具脚部	2.3	1.3	0.2	表金張り裏は腐食
20	10	前室埋土	銅	辻金具脚部	2.3	1.4	0.2	表金張り裏は一部のみ残存
21	10	前室埋土	銅	辻金具脚部	2.2	1.5	0.2	裏とも腐食、表に所々金が残る
22	10	後室埋土	銅	辻金具脚部	1.9+	1.3	0.1	腐食著しい、金は少量残る
23	10	後室埋土	銅	空玉	0.8+	1.4	孔径0.1	外面金張り内面腐食
24	10	前室埋土	銅	刺金	2.8	1.6+	0.5	鈎製
25	11	玄門埋土	鉄	鍔鐵	7.1+	刃部幅3.1	刃部厚さ0.5	茎部に木質残存、離身部～茎部
26	11	玄門埋土	鉄	鍔鐵	3.6+	刃部幅1.8	刃部厚さ0.45	茎部に木質残存、離身部～茎部
27	11	前室埋土	鉄	鍔鐵	5.5+	刃部厚0.85	刃部厚さ0.4	離身部～頸部
28	11	玄門埋土	鉄	鍔鐵	4.6+	刃部幅0.88	刃部厚さ0.3	離身部
29	11	前室埋土	鉄	鍔鐵	3.8+	刃部幅0.8	刃部厚さ0.35	離身部
30	11	後室埋土	鉄	鍔鐵	3.7+	刃部幅0.95	刃部厚さ0.4	離身部
31	11	後室埋土	鉄	鍔鐵	3.8+	刃部幅0.7	刃部厚さ0.25	離身部
32	11	後室埋土	鉄	鍔鐵	3.9+		茎部厚0.5	茎部
33	11	前室埋土	鉄	鍔鐵	4.6+	茎部幅0.5	茎部厚さ0.55	茎部
34	11	玄門埋土	鉄	鍔鐵	4.6+	茎部幅0.55	茎部厚さ0.53	茎部
35	11	前室埋土	鉄	弓付属金具	3.4	—	径0.5	
36	11	前室埋土	鉄	弓付属金具	3	—	径0.5	
37	11	前室埋土	鉄	弓付属金具	3	—	径0.5	
38	11	前室埋土	鉄	弓付属金具	3.2	—	径0.5	
39	11	前室埋土	鉄	弓付属金具	3	—	径0.5	
40	11	前室埋土	鉄	弓付属金具	3.1	—	径0.5	
41	11	後室埋土	鉄	刀子	4.2+	1.3	0.3	
42	11	前室埋土	鉄	刀子	4.7+	1.6	0.1	
43	11	後室埋土	鉄	刀子	5.9+	1.9	0.3	
44	11	前室埋土	鉄	刀	5.3+	2.6	0.7	
45	11	後室埋土+前室埋土	鉄	刀	10.9+	2.4	0.9	カマス切先、表面に木質残る
46	11	前室埋土	鉄	刀	2.6+	2.2+	0.7	刃茎部、青銅製ハトメ部分径1.0孔径0.4幅0.7+
47	11	後室埋土	鉄	刀装具	2.5+	2.9+	0.6+	外面金張り
48	11	前室埋土	青銅	刀装具	1.9+	2.6+	0.1	外面金張り
49	11	前室埋土	鉄	鎌	6.1+	1.7+	—	刃部先端
50	11	前室埋土	鉄	鎌	6.1+	3.0+	—	刃部袋部
51	11	前室埋土	鉄	鎌	4.0+	3.1+	—	袋部破片、内面に木痕あり
52	11	前室埋土	鉄	鎌	3.5+	2.1+	—	多角形袋部破片
53	11	後室埋土	鉄	鎌	5.2+	2.2+	—	身破片
54	11	前室埋土	鉄	鎌	4.0+	2.3	0.4	八角形袋部、内面に木痕あり
55	11	玄門埋土	鉄	鎌	3.7+	1.5+	0.7	袋部端部か
56	11	前室埋土	鉄	鎌	2.6+	2.6+	0.4	袋部破片、頭あり、内面に木痕あり
57	11	前室埋土	鉄	鎌	4.6+	2	—	石突部、織維痕あり
58	11	前室埋土	鉄	鎌	5.0+	2.0+	—	石突部
59	11	玄門埋土	鉄	鎌	10.4+	2.3+	—	石突部
60	11	前室埋土	鉄	鎌	9.3+	2.7+	—	石突部
61	12	前室埋土	鉄	骨	4.8+	径2.1	—	筒内環の総目
62	12	前室埋土	鉄	骨	3.7+	径2.7	—	筒外環と引手環の総目
63	12	前室埋土	鉄	骨	3.7+	—	1.4	引手
64	12	前室埋土	鉄	鏡板	3.2+	1.1+	径1.1	方形立開付素環鏡板
65	12	前室埋土	鉄	引手蓋	4.0+	1.2	—	64と同一個体の可能性もある
66	12	前室埋土	銅	鏡	11.5+	1.4+	—	輪鋸
67	12	前室埋土	鉄	鏡	4.5+	(長い方)1.9+(短い方)0.9+	—	三角錐形壺銘
68	12	前室埋土	鉄	鏡	3.9+	(長い方)1.7+(短い方)0.9+	—	三角錐形壺銘
69	12	前室埋土	鉄	鏡	7.8+	1.7+	0.6	三角錐形壺銘
70	12	前室埋土	鉄	鏡	3.1+	1.6+	0.2	三角錐形壺銘、木質痕あり
71	12	前室埋土	鉄	兵庫鏡	2.8+	3.4+	—	
72	12	前室埋土	鉄	兵庫鏡	6.2+	3.0+	—	
73	12	前室埋土	鉄	兵庫鏡	2.8+	2.5+	0.9	
74	12	前室埋土	鉄	吊金具	2.2+	(長い方)2.2+(短い方)1.3+	0.5	
75	12	前室埋土	鉄	吊金具	2.0+	1.75+	0.8~1.1	鉄地金銅張
76	12	前室埋土	鉄	鉤具	1.7+	0.6~0.7	径0.5	
77	12	前室埋土	鉄	鉤具	2.5+	3.3+	0.4	
78	12	前室埋土	鉄	シオテ金具	4.9+	1.2+	—	
79	12	前室埋土	鉄	シオテ金具	4.1	0.8	0.8	
80	12	前室埋土	鉄	円形シオテ座金具	1.0+	径2.2+	0.2	鉄地金銅張、内面漆状の付着物あり
81	12	前室埋土	鉄	円形シオテ座金具	0.8+	1.7+	0.2	鉄地金銅張、内面漆状の付着物あり
82	12	前室埋土	鉄	鞍綫金具	1.7+	1.2+	0.1	鉄地金銅張
83	12	前室埋土	鉄	鞍綫金具	3.7+	1.1	0.2	鉄地金銅張、裏面木目痕あり
84	12	前室埋土	鉄	鞍綫金具	4.2+	1.2	0.2	鉄地金銅張
85	12	前室埋土	鉄	鞍綫金具	3.2+	1.3	0.1	鉄地金銅張
86	12	前室埋土	鉄	鞍綫金具	2.7+	1.2	0.15	鉄啓0.6、鉄地金銅張
87	12	前室埋土	鉄	鞍綫金具	2.2+	1.1	0.15	鉄地金銅張
88	12	前室埋土	鉄	銚頭	径1.0	—	高さ0.9	鉄地金銅張
89	12	前室埋土	鉄	銚頭	径0.9	—	高さ0.7	鉄地金銅張
90	12	前室埋土	鉄	銚頭	径0.8	—	高さ0.7	鉄地金銅張
91	12	前室埋土	鉄	銚頭	径0.8	—	高さ0.8	鉄地金銅張
92	12	前室埋土	鉄	銚頭	径0.6	—	高さ0.7	鉄地金銅張
93	12	前室埋土	鉄	銚頭	径0.7	—	高さ0.4	鉄地金銅張
94	12	前室埋土	鉄	二脚鉢状金具	径1.7×1.7	—	高さ1.5+	鉄地金銅張、内面漆状の付着物あり
95	12	前室埋土	鉄	二脚鉢状金具	径1.5×1.9	—	高さ1	鉄地金銅張、内面漆状の付着物あり
96	12	前室埋土	鉄	二脚鉢状金具	1.2	1.3	高さ0.65+	鉄地金銅張、内面漆状の付着物あり
97	12	前室埋土	鉄	二脚鉢状金具	1.1	1.3+	高さ0.75+	鉄地金銅張、内面漆状の付着物あり
98	13	前室埋土	鉄	辻金具鉢部	2.5+	径(推定)4.0	0.1	鉄地金銅張、下方八角形、上方円形、高く盛り上がる
99	13	前室埋土	鉄	辻金具鉢部	1.5	3.5	0.2	鉄地金銅張、下方八角形、上方円形、低くや扁平
100	13	玄門埋土	鉄	辻金具鉢部	—	2.8	0.2~0.4	鉄地金銅張、下方八角形、上方円形、高く盛り上がる
101	13	前室埋土	鉄	雲珠鉢部	1.7+	2.8+	0.4	鉄地金銅張、下方段あり
102	13	前室埋土	鉄	雲珠鉢部	1.7+	2.7+	0.3	鉄地金銅張、下方段あり
103	13	前室埋土	鉄	雲珠鉢部	1.5+	2.5+	0.1	鉄地金銅張、下方段あり
104	13	前室埋土	鉄	辻金具鉢部	2.3+	2.4+	0.1	鉄地金銅張、下方八角形、上方円形、高く盛り上がる
105	13	前室埋土	鉄	雲珠鉢部	0.9+	3.1+	(推定)0.2	鉄地金銅張、下方段あり
106	13	前室埋土	鉄	雲珠鉢部	2.1+	2.3+	(推定)0.1	鉄地金銅張、下方段あり

表5 出土金属器観察表2

遺物番号	図版番号	出土地点	材質	種類	長さ・幅(cm)	幅・横(cm)	厚さ(cm)	備考
107	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	1.9+	2.1+	0.1	鉄地金銅張、下方八角形?、上方円形、高く盛り上がる
108	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	1.7+	2.5+	0.2	鉄地金銅張
109	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	2.3	1.9+	0.1	鉄地金銅張
110	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	1.9+	2	0.2	鉄地金銅張、長方形の鉄板がはりつく
111	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	2.1+	1.8	0.3	鉄地金銅張
112	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	1.9+	1.9	0.2	鉄地金銅張
113	13	玄門埋土	鉄	辻金具鉤部	2.0+	1.8	0.2	鉄地金銅張
114	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	1.6+	1.8	0.2	鉄地金銅張
115	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	1.8+	2.1	0.2	鉄地金銅張
116	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	2.5	1.9	0.1	鉄地金銅張
117	13	前室埋土	鉄	辻金具鉤部	3	2	0.2	鉄地金銅張
118	13	後室埋土	鉄	辻金具鉤部	2.6	1.9	0.2	鉄地金銅張
119	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	2.1+	1.8	0.2	鉄地金銅張
120	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	1.4+	1.9	0.2	鉄地金銅張
121	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	1.9+	1.9	0.2	鉄地金銅張
122	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	1.5+	1.9	0.3	鉄地金銅張
123	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	9	2.9	0.2	鉄地金銅張
124	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	1.8	2.1	0.18	鉄地金銅張
125	13	前室埋土	鉄	雲珠脚部	1.9	2.3	0.2	鉄地金銅張
126	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	2.0+	1.7+	0.1~0.3	鉄地金銅張
127	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	2.7+	3.6+	0.3	鉄地金銅張
128	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	2.1+	3.0+	0.1	鉄地金銅張
129	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	1.6+	3.4+	0.1	鉄地金銅張、裏面緑錆痕少量あり
130	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	2.4+	1.4+	0.2	鉄地金銅張
131	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	1.9	2.2	0.2	鉄地金銅張
132	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	2.8+	1.2	0.2	鉄地金銅張
133	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	3.6+	1.4	0.1~0.2	鉄地金銅張
134	13	前室埋土	鉄	心葉形三葉鏡板	3.4+	2.5+	0.5	鉄地金銅張
135	13	前室埋土	鉄	鏡形杏葉	2.4+	2.7+	0.2	鉄地金銅張
136	13	前室埋土	鉄	鏡板・杏葉	3.1+	2.0+	0.2	鉄地金銅張、布目痕あり
137	13	前室埋土	鉄	鏡板・杏葉	2.5+	2.1+	0.2~0.4	鉄地金銅張
138	13	前室埋土	鉄	鏡板・杏葉	1.9+	2.6+	0.4	鉄地金銅張
139	13	前室埋土	鉄	鏡板・杏葉	2.2+	1.4+	0.2	鉄地金銅張
140	13	前室埋土	鉄	鏡板・杏葉	2.4+	0.9	0.1	鉄地金銅張
141	14	前室埋土	鉄	胃	5.0+	3.0+	0.2	横矧広板紙留衝角付胃?複矧広板の可能性もある
142	14	前室埋土	鉄	胃	6.2+	8.0+	上0.4、下0.4?	横矧広板紙留衝角付胃?複矧広板の可能性もある
143	14	前室埋土	鉄	胃	4.1+	2.6+	0.3	横矧広板紙留衝角付胃?複矧広板の可能性もある
144	14	玄門埋土	鉄	胃	4.0+	4.1+	0.2	横矧広板紙留衝角付胃?複矧広板の可能性もある
145	14	前室埋土	鉄	胃	3.9+	3.0+	0.2	横矧広板紙留衝角付胃?複矧広板の可能性もある
146	14	前室埋土	鉄	小札	3.5+	2.8	0.2	革製の紐?痕あり
147	14	玄門埋土	鉄	小札	5.0+	4.2+	0.2	3枚重なる
148	14	前室埋土	鉄	小札	3.7	2.1	0.2	ほぼ完形、孔5つあり
149	14	前室埋土	鉄	小札	4.6+	2.6	0.3	2枚重なる、孔7つあり、うち1つに縫痕あり
150	14	前室埋土	鉄	小札	3.4+	2.6	0.2	2枚重なる、孔4つあり、布目痕あり
151	14	前室埋土	鉄	小札	3.3+	3	0.2	縫痕あり
152	14	前室埋土	鉄	小札	3.0+	2.4	0.2	2枚重なる、孔2つあり、縫痕あり
153	14	前室埋土	鉄	小札	3.2+	2.9+	0.1~0.2	3枚重なる
154	14	前室埋土	鉄	小札	3.5+	2.5	0.2	
155	14	後室埋土	鉄	小札	3.9+	2.6	0.5	
156	14	前室埋土	鉄	小札	4.0+	2.6	0.2	
157	14	前室埋土	鉄	小札	4.0+	2.5	0.2	
158	14	前室埋土	鉄	小札	3.4+	3.1	0.1	
159	14	前室埋土	鉄	小札	3.8+	1.9+	0.1	孔1つ確認
160	14	前室埋土	鉄	小札	4.0+	2.2	0.2	2枚重なる、紺痕あり
161	14	前室埋土	鉄	小札	4.8+	2.5	0.2	孔6つあり、布目痕あり、紺痕あり
162	14	前室埋土	鉄	小札	5.6+	2.6	0.3	
163	14	前室埋土	鉄	小札	4.2+	2.7	0.3	木質あり、鉄片付着
164	14	菱造埋土	鉄	小札	3.8+	2.3	0.2	孔3つ確認できる、木質あり
165	15	前室埋土	鉄	小札	6.2+	2.9	0.1~0.3	孔1つあり、縫痕あり
166	15	前室埋土	鉄	小札	5.0+	2.8	0.2~0.3	孔4つあり、布目痕あり
167	15	前室埋土	鉄	小札	3.7+	2.9	0.2	孔5つあり、縫痕あり
168	15	前室埋土	鉄	小札	4.2+	2.5	0.15	孔3つ確認、紺痕あり
169	15	前室埋土	鉄	小札	3.6+	2.4	0.2	孔4つあり
170	15	前室埋土	鉄	小札	3.6+	2.4	0.2	孔4つあり、縫痕あり
171	15	前室埋土	鉄	小札	5.0+	2.5	0.2	孔2つあり
172	15	前室埋土	鉄	小札	3.9+	2.8+	0.3	縫痕あり
173	15	前室埋土	鉄	小札	3.5+	3	0.3	縫痕あり
174	15	前室埋土	鉄	小札	3.1+	3.0+	0.2	縫痕あり
175	15	後室埋土	鉄	小札	4.4+	2.2	0.2	孔2つあり、布目痕あり
176	15	前室埋土	鉄	小札	2.8+	2.5	0.2	孔4つあり、縫痕あり
177	15	玄門埋土	鉄	小札	3.1+	1.9+	0.2	孔2つ確認、木痕あり
178	15	前室埋土	鉄	小札	3.5+	2.1	0.1~0.2	孔7つあり、縫痕あり、木痕あり
179	15	前室埋土	鉄	小札	2.7+	3.2+	0.15	孔3つ確認、布目痕あり
180	15	前室埋土	鉄	小札	4.4+	2.8+	0.2	孔2つ確認、布目痕あり、革製紐?あり
181	15	前室埋土	鉄	小札	4.7+	2.6+	0.2	孔4つあり、布目痕あり
182	15	前室埋土	鉄	小札	3.1+	3.1	0.1	2枚重なる、布目痕あり、孔確認できず
183	15	玄門埋土	鉄	小札	2.3+	2.5+	0.15	木質あり
184	15	前室埋土	鉄	小札	2.5+	2	0.2	縫痕あり
185	15	前室埋土	鉄	小札	1.5~2.0	2.6+	0.2	孔4つ確認、縫痕あり
186	15	前室埋土	鉄	小札	3.1+	3.4+	0.2	布目痕、木痕あり
187	15	前室埋土	鉄	小札	4.4+	4.8+	0.2	木痕あり、孔1つ確認
188	15	前室埋土	鉄	小札	2.2+	1.7+	0.2	一列に孔5つ並ぶ
189	15	前室埋土	鉄	小札	6	2.4	0.2~0.25	ほぼ完形、2列に孔7つずつ並ぶ、裏面木痕あり
190	15	玄門埋土	鉄	板状製品	4.8+	4.5	0.3	鉄地金銅張、紙3枚残存、孔4確認、布目痕あり
191	15	前室埋土	鉄	鐵斧	5.5+	3.2	0.6~1.2	袋部折曲
192	15	前室埋土	鉄	不明	4.5+	2.6+	0.2	L字に折曲がる



第17図 相原古墳群復元配置図 ($S = 1/2,500$)



第18図 相原古墳墳形復元想定図 ($S = 1/500$)

第Ⅲ章　まとめ

1. 調査のまとめ

a) 石室について

本古墳の最大の特徴は、大きな石棚にある。石室は、構築する石材が巨石化しており、後室よりやや小さな前室を持つ複室構造である。また、石室現存長 8.62 m、後室天井高は 4.65 m を測る大きな石室である。現在、福岡県内において石棚を持つ古墳は 25 基ほど確認されている。宗像地域においては、本市「平等寺瀬戸 1 号墳」（市指定）、「桜京古墳」（国史跡、広義での石棚）、福津市「勝浦高原 5 号墳」、「新原・奴山 34 号墳」、「同 44 号墳」（国史跡津屋崎古墳群）の 5 基が確認されている。また、県内において石棚を持つ前方後円墳は、宮若市の「里古墳」、桂川町の「王塚古墳」（特別史跡）、うきは市（旧吉井町）の「日岡古墳」（国指定史跡）、同市（旧浮羽町）の「重定古墳」（国指定史跡）の 4 基に「桜京古墳」を加えた 5 基である。「里古墳」を除きいずれも装飾をもつ首長墓である。

本古墳の石棚は、奥壁と側壁の腰石の上に位置し、側壁と奥壁に組み込まれている。また、石棚の迫出し端部の下にはこれと並行して仕切石があり、その玄門側にもう一列仕切石が確認された。石棚下の仕切石内は玉砂利が充填しており、屍床と考えられる。玄門側の仕切石は、中央部に石材がなく、抜き取りの痕跡も確認できなかったため、当初から 2 石のみで構成されていたと考えられる。築造時に造られたものか、追葬時に造られたものかは不明である。築造時から設置されていたのならば、前障と捉えることもできる。

b) 出土遺物について

今回の調査では、須恵器、土師器、鉄器、銅製品、装身具、石器が出土した。出土遺物の中で土器類は非常に少なかった。鉄器類は多く出土したがいずれも破片で、腐食が進んでおり、原形を判断することが難しかった。また、盗掘時に掻き出されたようで前室からの出土が多く、前室と後室の異なる層位で出土したものとの接合も確認された。

須恵器は、器台、甕、壺が出土した。器台は焼成が非常に良いもの（3・4・5）、やや甘いもの（6）がある。（4）は器台に壺を接合した脚付壺で、市内からは久原遺跡 II -22 号墳などから出土しているが形状は似ていない。（5）は 3 段以上の方形透かしがある脚部破片で、外面にカキ目が施される。市内出土の器台は波状文が施されるものがほとんどで、稻元日焼原遺跡の 4 号竪穴から出土した器台の 1 点は同様のカキ目が施されている。この 4 号竪穴は、4 号窯に付随するものと考えられ、6 世紀後半に操業していたとされている。（1）の長頸壺底部は市内の出土例から 7 世紀前半であり、追葬時の副葬品の可能性がある。

土師器壺の一群は、底部切離しが回転イトキリで、口径は 11 ~ 12.5cm、底径は 7.5 ~ 7.8cm を測る。13 世紀後半のものである。

金銅製品は辻金具と空玉である。

装身具は瑪瑙製の切子玉（1 個）、琥珀製の平玉（2 個）、ガラス小玉破片である。

鉄器については、鎌（平根 2 本、尖根 57 本以上）刀類（太刀 2 本、刀子 2 本、刀装具 1 個体）、鉢（3 本以上）、馬具（轡、引手金具、方形立闇付素環鏡板、鉄地金銅張製心葉形鏡板、金銅製辻金具、鉄地金銅張辻金具・雲珠、輪燈、木心金属張三角錐形壺燈、兵庫鎖、円形シオデ座金具、鉄地金銅張製鞍縁金具）、冑（横引板鉢止衝角付冑）、鎧（挂甲小札）、斧（袋状鉄斧）が出土した。

今回の調査で出土した遺物からは明確な時期を判断できるものはないが、過去に報告されている資料^{註1}からは小田編年Ⅲ b 期（陶邑 TK43 形式）の須恵器の坏身がある。出土している器台も同時期のものであろう。さらに、同報告の中にある斜格子状キザミを持つ器台脚部と（6）器台脚裾は同一個体である可能性がある。また、金銅製辻金具、鉄地金銅張製心葉形鏡板、鉄地金銅張製辻金具などについては、新羅系の可能性が高く、その中でも金銅製辻金具は沖ノ島からの出土品に類似しているとの指摘^{註2}があった。

2. 相原古墳の位置付け

a) 宗像地域の石棚を持つ古墳について

宗像地域の石棚を持つ古墳としては、「桜京古墳」がはじめに築造され、次に「平等寺瀬戸 1 号墳」と「新原・奴山 44 号墳」が同時期に築造され、その後本古墳が築造され、最後に「勝浦高原 5 号墳」が造られたと考えられる。いずれも 6 世紀後葉代の築造で、この時期に集中して造られたことがわかる。

b) 宗像地域における相原古墳位置付け

本古墳は、全長 62 m 以上の前方後円墳である。相原古墳群は、調査前に破壊された古墳が 13 基、調査後破壊が 22 基、現存 7 基（相原古墳含む）の古墳群であり、東海第五高校歴史クラブの分布調査により、その群構成の記録が残った。その後、福岡県教育委員会の調査により、多くの調査成果を得る事が出来た。群構成は、5 世紀後葉～6 世紀前葉に竪穴系横口式石室の円墳群が造られ、次に相原古墳を含む一群が 6 世紀後葉～7 世紀前葉にかけて、丘陵上に造られ、最後に 7 世紀中葉～後葉にかけて、丘陵南斜面に展開する一群が造営されたようである。^{註3} このうち、相原古墳を除くと最大ものは相原 2 号墳の直径 20 m を測る円墳で、他の古墳は 10 ～ 15 m 前後の円墳である。

また、相原古墳の築造期には、すでに宗像一族の奥津城の中心は津屋崎古墳群へ移動して久しく、本古墳は、宗像地域の内陸部の釣川中流域に突如として現れた大型前方後円墳である。また、全長 102 m を測る宗像地域最大の前方後円墳である在自劍塚古墳の築造に前後するものと思われる。宗像地域の内陸部において全長 50 m 前後の前方後円墳は「東郷高塚古墳」(64 m)、「田久貴船前 1 号墳」(50 m)、「久原Ⅱ-3 号墳」(45 m)、「須恵クヒノ浦古墳」(45 m) しか確認されておらず、いかに相原古墳が突出しているかがわかる。

c) 被葬者について

副葬品も武具を中心に多岐にわたり、被葬者は武人としての性格が非常に強い人物であったと考えられる。特に鉢が多く、新羅系の金銅製馬具も出土していることも注目すべき点であろう。過去の記録による墳丘の規模、今回判明した石室の規模や構造から考えると、宗像地域屈指の有

力者であり、非常に強い権力を持った人物であろう。同時期の前方後円墳の中では、「須多田下ノ口古墳」(82 m)に次ぐ規模である。対外的には新羅との関係が緊迫した時期で、航海技術に長けた宗像地域の人々が重要視された可能性がある。また、沖ノ島で検出された祭祀遺跡は「岩陰祭祀」の段階になり、新羅製の金製指輪、金銅製馬具、ササン朝ペルシア伝来のカットグラス碗などの舶来品も奉納されている。本古墳から出土した金銅製辻金具は、この時期の沖ノ島出土のものと類似しているとの指摘もあった。また、後続する相原2号墳から出土した新羅土器の壺などからも対外交渉に深く関わっていたと考えられる。よって本古墳の被葬者は、釣川を中心に市内内陸部一円を束ね、対外交渉において重要な役割を担い、中央との繋がりも深い人物であろう。

3. 今後の課題

本古墳現状は、石室をかろうじて覆う程度の墳丘が残存しており、周辺には牛舎が建ち並んでいる。しかし、薄牧場の関係者から「現地盤は昔の高さから2m程盛土をしている」と聞く。造成時を知る花田氏からは「羨道部や後円部の端は残っているかもしれない」との指摘を受けた。このことから本古墳の墳丘は地下に残存しており、規模の特定につながる可能性がある。

これらを踏まえて今後の保存整備に向けて必要なことは以下の3点である。

- ①墳丘規模及び形状の確認
- ②羨道部の確認
- ③出土遺物の詳細な検討

特に①は、市内で最大の前方後円墳といわれている古墳であり、残存長だけでも確認が必要であろう。②の羨道部についても、花田氏の指摘のとおりならば石室の全長が把握できる可能性がある。これらの追加調査による成果を合わせ、必要な保存整備措置について考えていきたい。③は、新羅系馬具などの出土遺物について専門家に検討を依頼する予定である。具体的な追加調査の時期については、関係者と協議し決定したいと考える。

5. 最後に

この古墳の調査及び報告書執筆にあたり多くの人の協力を得ました。厚く御礼を申し上げます。

池ノ上宏 石山勲 鎌田隆徳 川口陽子 岸本圭 斎藤大輔 重藤輝行 薄一郎

西谷正 花田勝広 宮本香織 桃崎祐輔 山村信榮 吉田東明 吉村靖徳

(敬称略・五十音順)

〈註〉

1 『倭政権と古代の宗像 2005年』 花田勝広 P.169 図4 相原古墳群の遺物 より

2 2013年1月31日に宗像市文化財整理室にて資料について御教示を頂いた。

3 『倭政権と古代の宗像 2005年』 花田勝広 P.167 図3 相原古墳群の復元と群構成 より

参考文献

- 『新原・奴山古墳群』 福岡県文化財調査報告書 第54集 福岡県教育委員会 1977
『相原古墳群』 宗像町文化財調査報告書 第1集 宗像町教育委員会 1979
『久戸古墳群』 宗像町文化財調査報告書 第2集 宗像町教育委員会 1979
『久戸古墳群II』 宗像町文化財調査報告書 第3集 宗像町教育委員会 1980
『久原遺跡』 宗像市文化財調査報告書 第19集 宗像市教育委員会 1988
『稻元日焼原』 宗像市文化財調査報告書 第22集 宗像市教育委員会 1989
『名残II』 宗像市文化財調査報告書 第24集 宗像市教育委員会 1990
『桜京古墳』 宗像市文化財調査報告書 第58集 宗像市教育委員会 2007
『田野瀬戸古墳』 宗像市文化財調査報告書 第59集 宗像市教育委員会 2007
『桜京古墳II』 宗像市文化財調査報告書 第65集 宗像市教育委員会 2012
『倭政権と古代の宗像』 2005年 花田勝広 2005
「石棚考 -九州における横穴式石室内石棚状施設の成立と展開-」
『日本考古学協会14』 藏富士 寛 2002
「古墳時代後期の衝角付冑」
『待兼山考古学論集II -大阪大学考古学研究室20周年記念論集-』 鈴木一有 2010
「いわゆる「素環の巻」について」 『日本古代史研究 創刊号』 岡安光彦 1984
「古墳時代の壺鏡の分類と編年」 『日本古代史研究 第3号』 斎藤弘
「宗像地域における古墳時代首長墓の対外交渉と沖ノ島祭祀」
『宗像・沖ノ島と関連遺産群』 重藤輝行 2011
『竹原古墳 竹原古墳保存修理事業概要報告』 若宮町文化財調査報告書 第4集
若宮町教育委員会 1982
「古墳時代遺物の基礎的研究—資料編(II)ー」『東京国立博物館紀要』 第26号
東京国立博物館 本村豪章 1991
『沖ノ島』 宗像大社復興期成会 1958
『続沖ノ島』 宗像大社復興期成会 1961
『宗像 沖ノ島』 宗像大社復興期成会 1979

写真図版

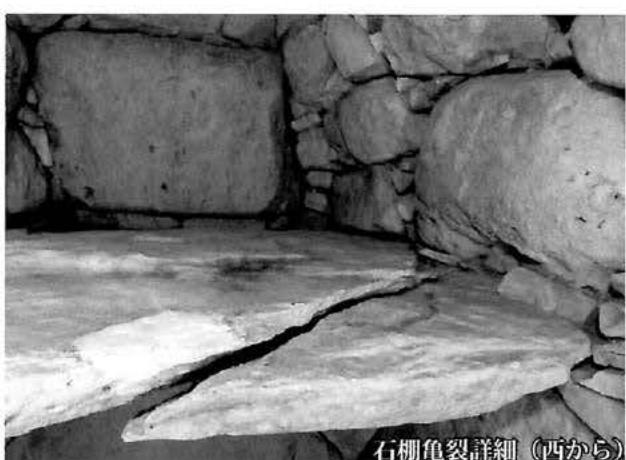
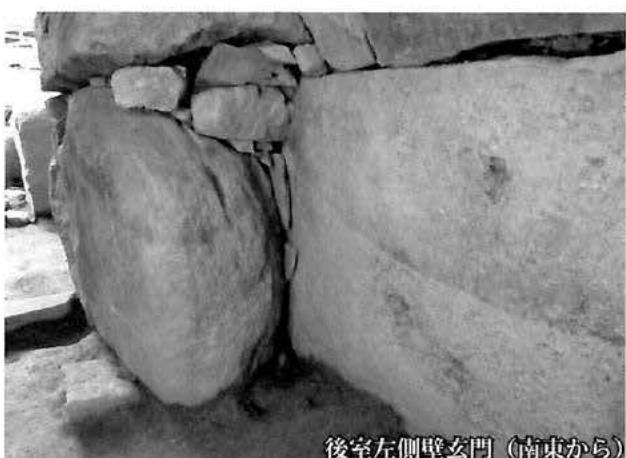
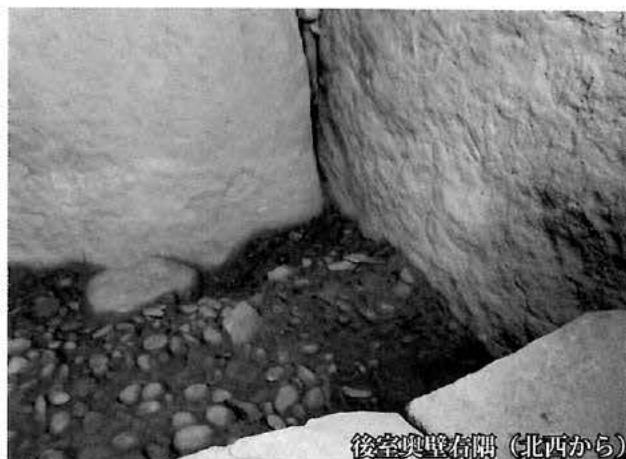


相原古墳周辺航空写真（南東から）



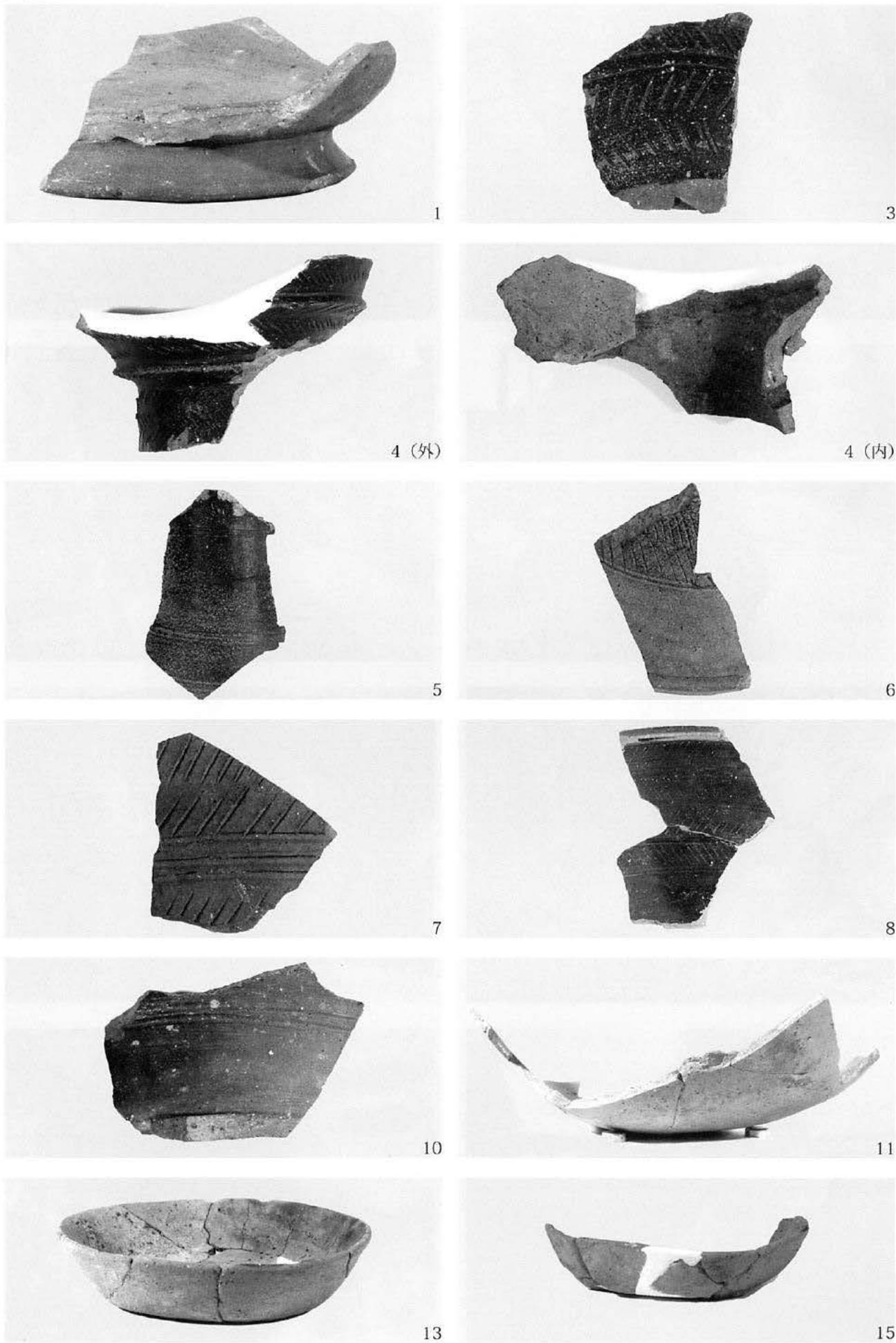
昭和 47 年撮影相原古墳全景（南東から）

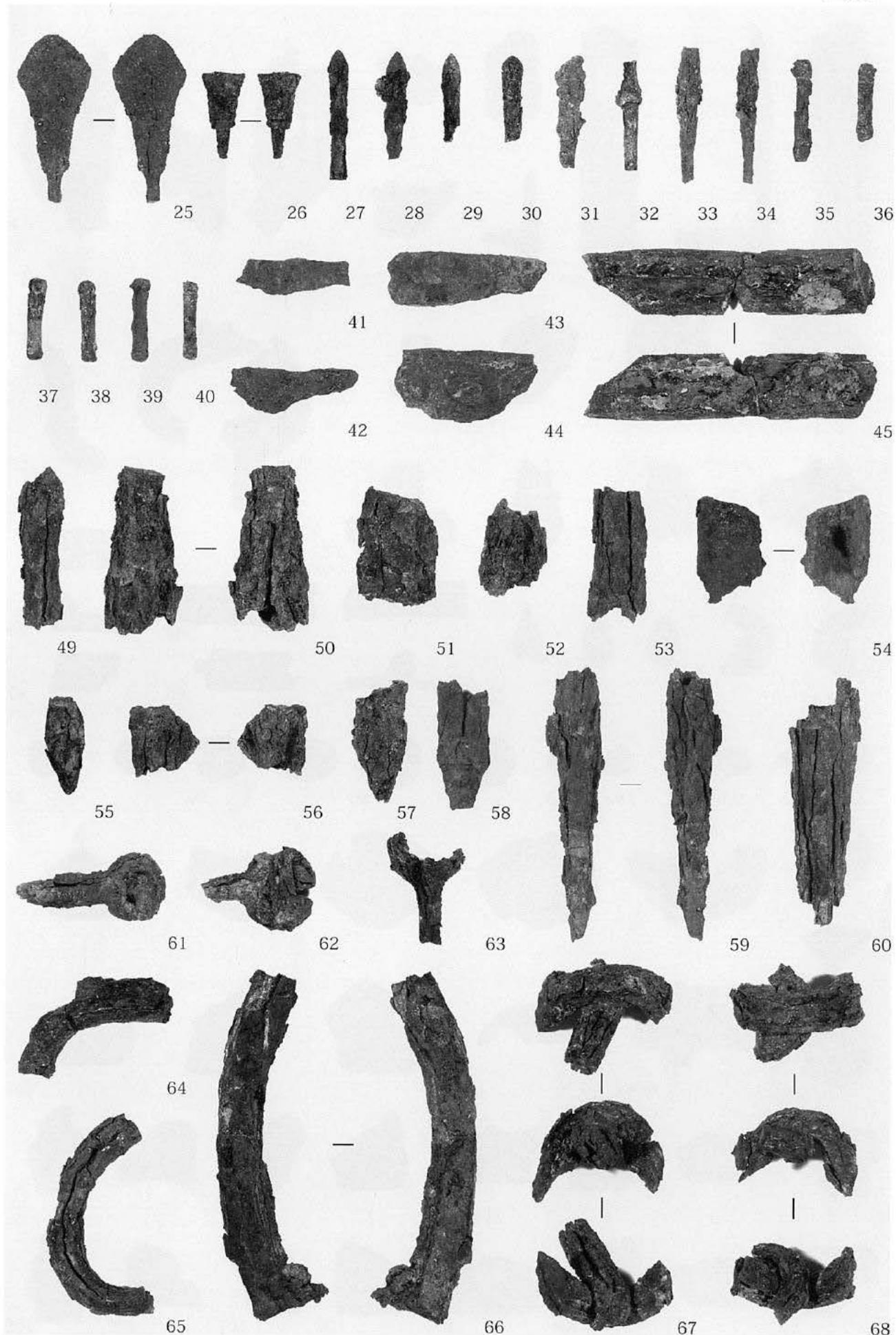
図版 2



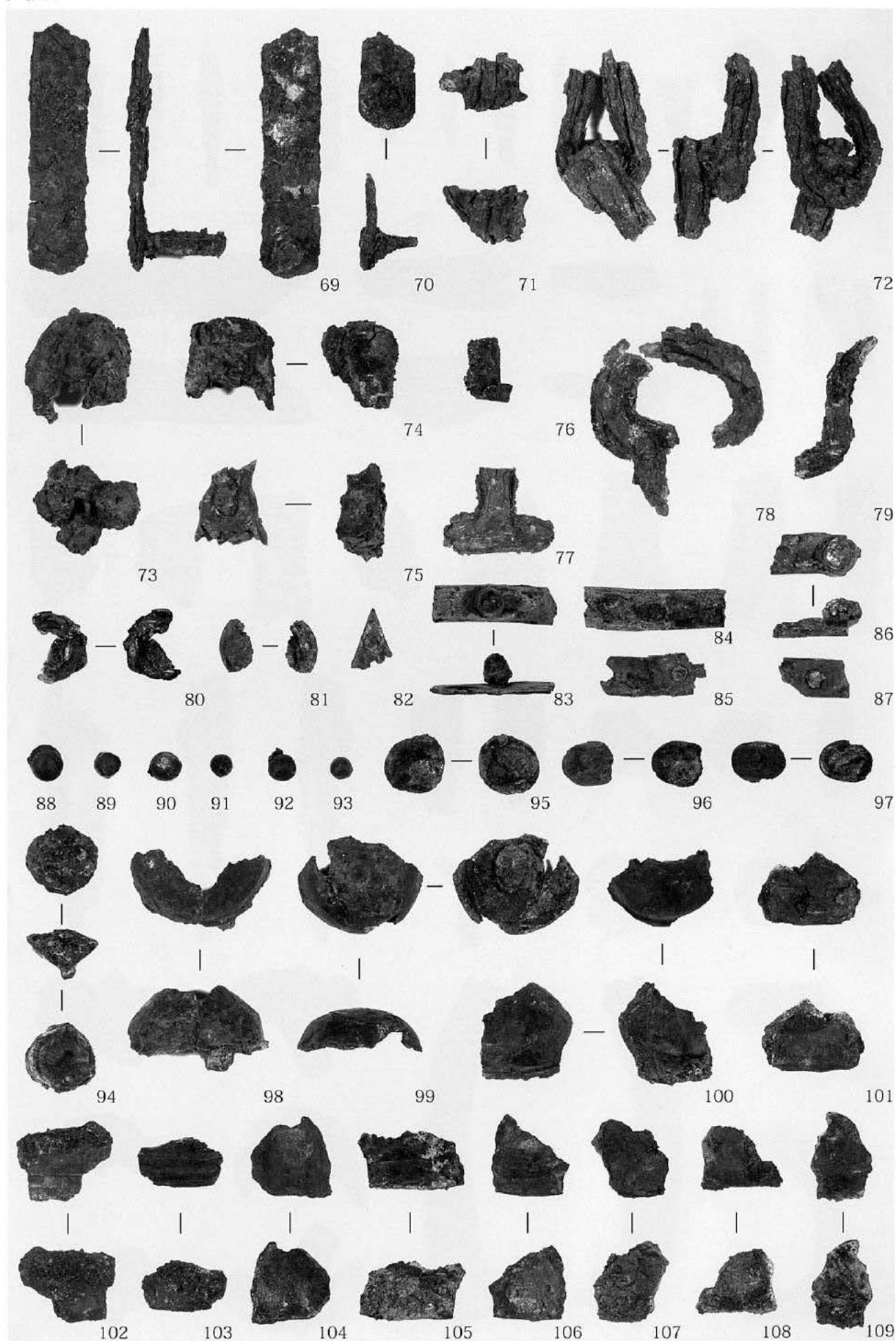


図版 4

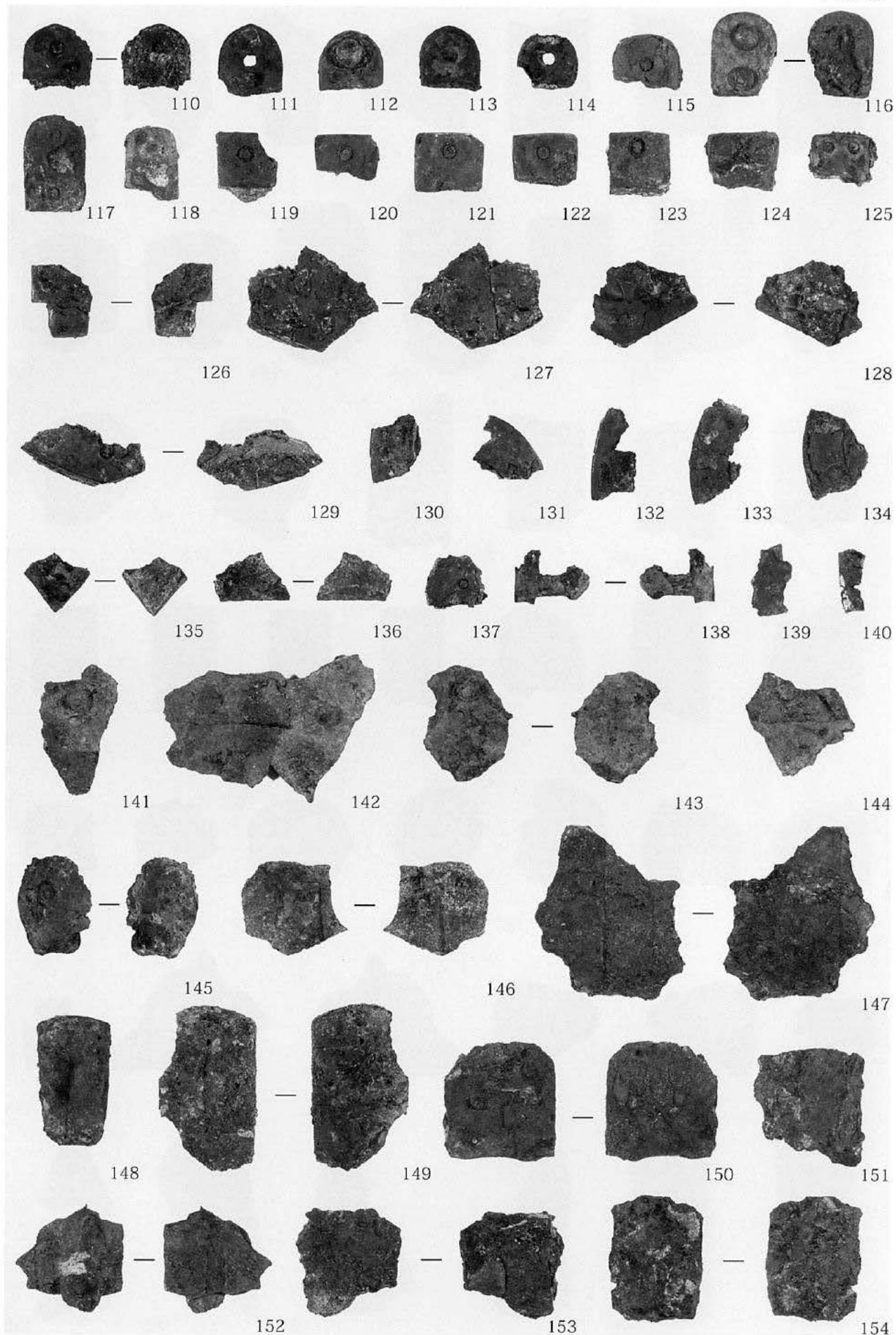




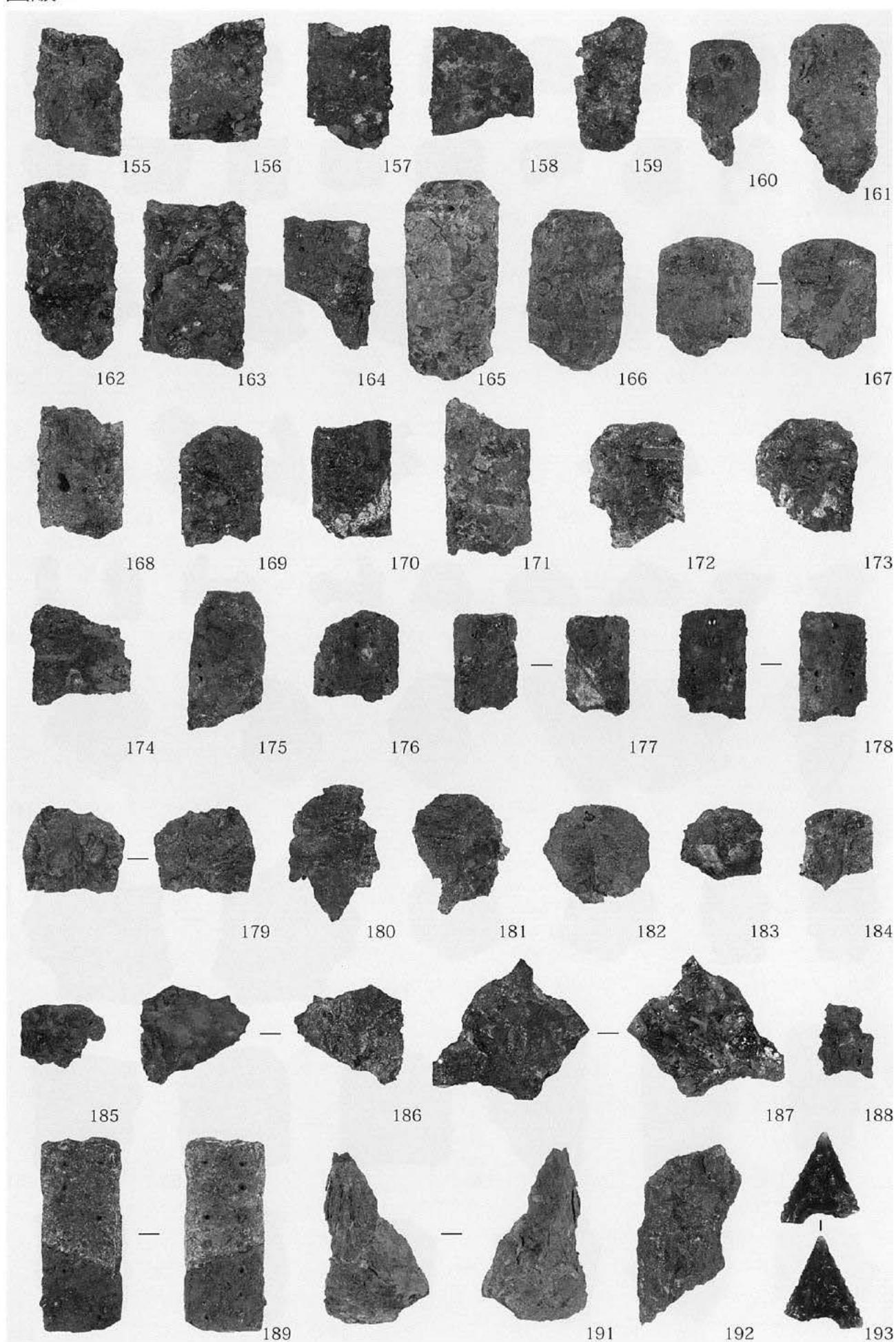
図版 6



図版 7



図版 8



報告書抄録

ふりがな	そうばるこふん							
書名	相原古墳							
副書名	- 福岡県宗像市河東所在遺跡の発掘調査報告 -							
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	坂本雄介							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市東郷一丁目1番1号 〒811-3492 福岡県宗像市深田588（海の道 むなかた館） TEL (0940) 62-2600 FAX (0940) 62-2601							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 °, ′, ″	東経 °, ′, ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
そうばるこふん 相原古墳	むなかたしかとう 宗像市河東470- 13-1・2・471番地	40220	00213	33° 49' 22"	130° 32' 54"	2011.10.01 ～ 2012.03.30	190m ²	保存目的の 調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
相原古墳	墳墓	古墳時代後期	複室横穴式石室	須恵器器台 馬具、武具 装身具		後室に石棚と仕切石が ある		
要約	本古墳は、孔大寺山（標高499m）から西へ派生した丘陵上に位置し、丘陵西側に横山川が流れている。周辺は昭和52・53年度に調査が実施され、第2号墳からは新羅土器壺が出土している。今回調査した古墳は、相原古墳E-1号墳と呼ばれていた前方後円墳である。過去に福岡教育大学の波多野院三氏により調査が行われ、石棚を持つ複室の横穴式石室であることが確認されている。調査の結果、石室長8.62m以上、玄室天井高4.65m、玄室長3.84m、玄室奥壁側幅2.21m、玄室玄門側幅2.47m、前室天井高3.26m、前室長2.12m、前室玄門側幅2.12m、前室羨道側幅2.35mを測ることが確認された。石棚直下に確認されていた仕切り石の50～70cm玄門側床面から2石の仕切り石が確認された。出土遺物は、小札、鉄鎌、鉄鋸、鉄刀、雲珠、馬具、弓付金具、瑪瑙製切子玉、琥珀製平玉、ガラス製小玉、須恵器器台、甕、高台付壺、土師器壺（イトキリ）が出土した。時期は6世紀後半頃と考えられる。							

